






長崎へ遊学されてたそうですね



三年と ちよつとです



ここはひどいですよ




何しろ患者は蚤とシラミのたかった  
腫れ物だらけ

DVD-Video

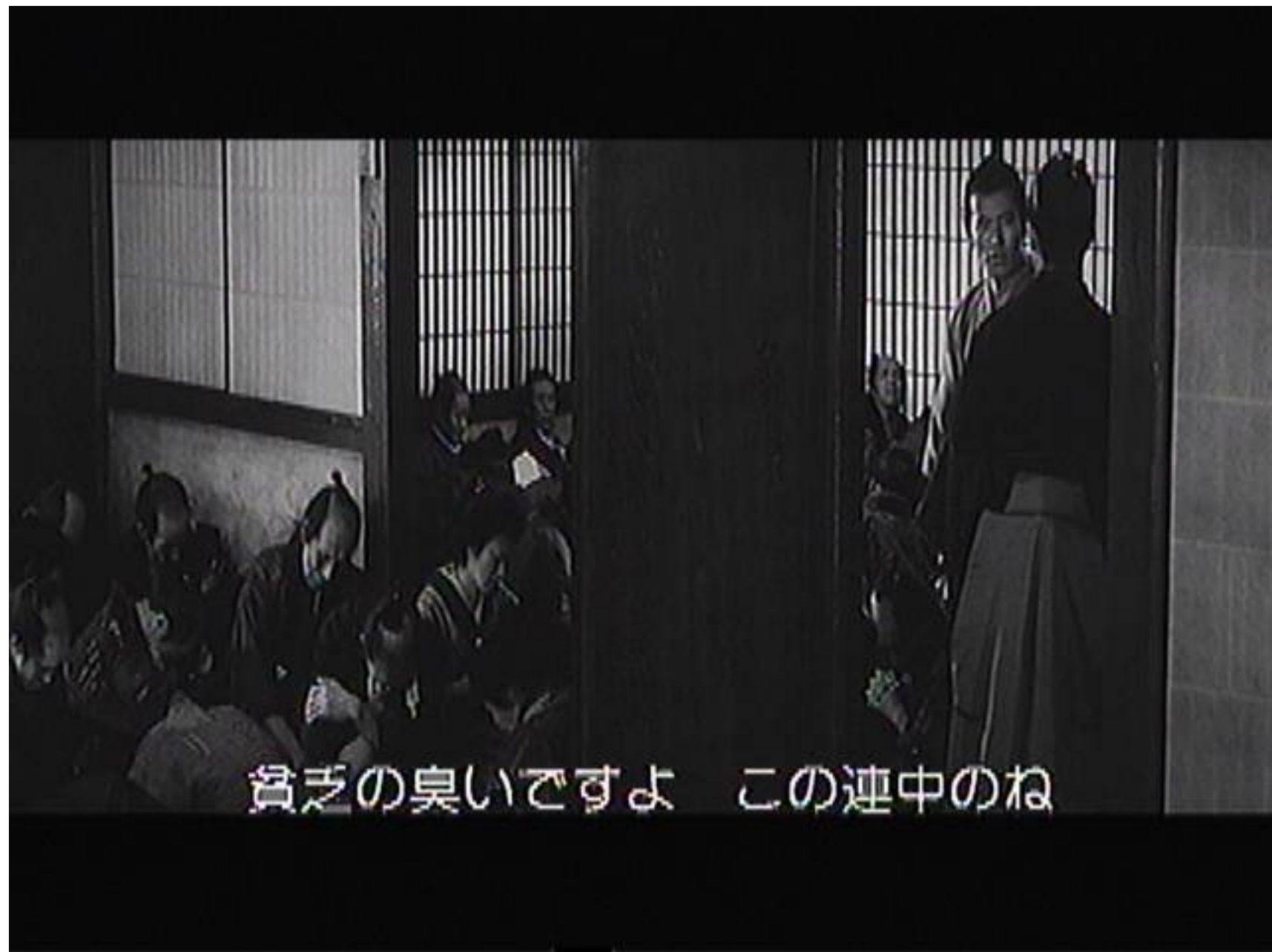
再生 ▶

医者なんかになろうとした自分を  
呪いたくなりますよ

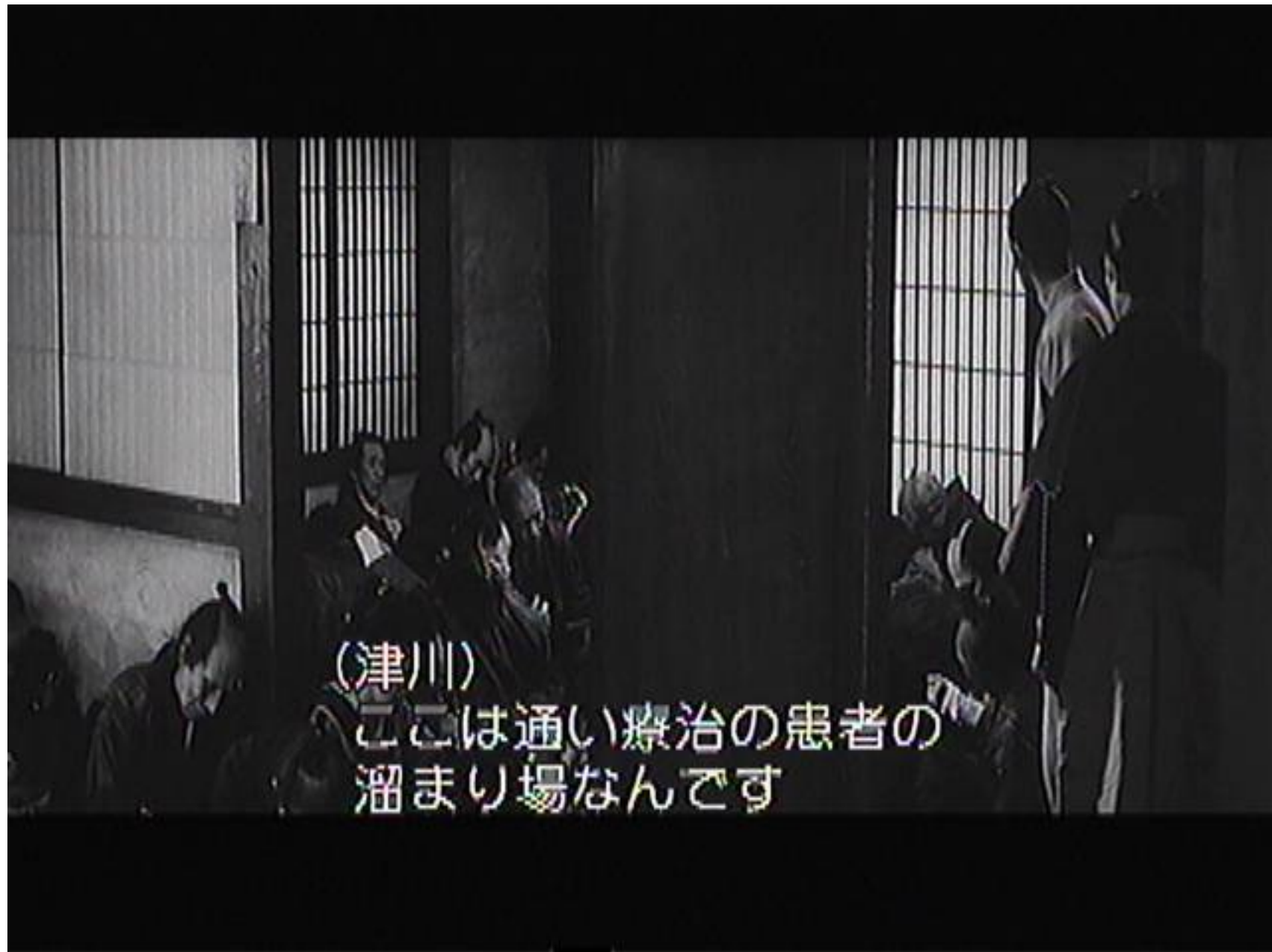




何ですか？  
この果物の腐ったような臭いは



貧乏の臭いですよ この連中のね

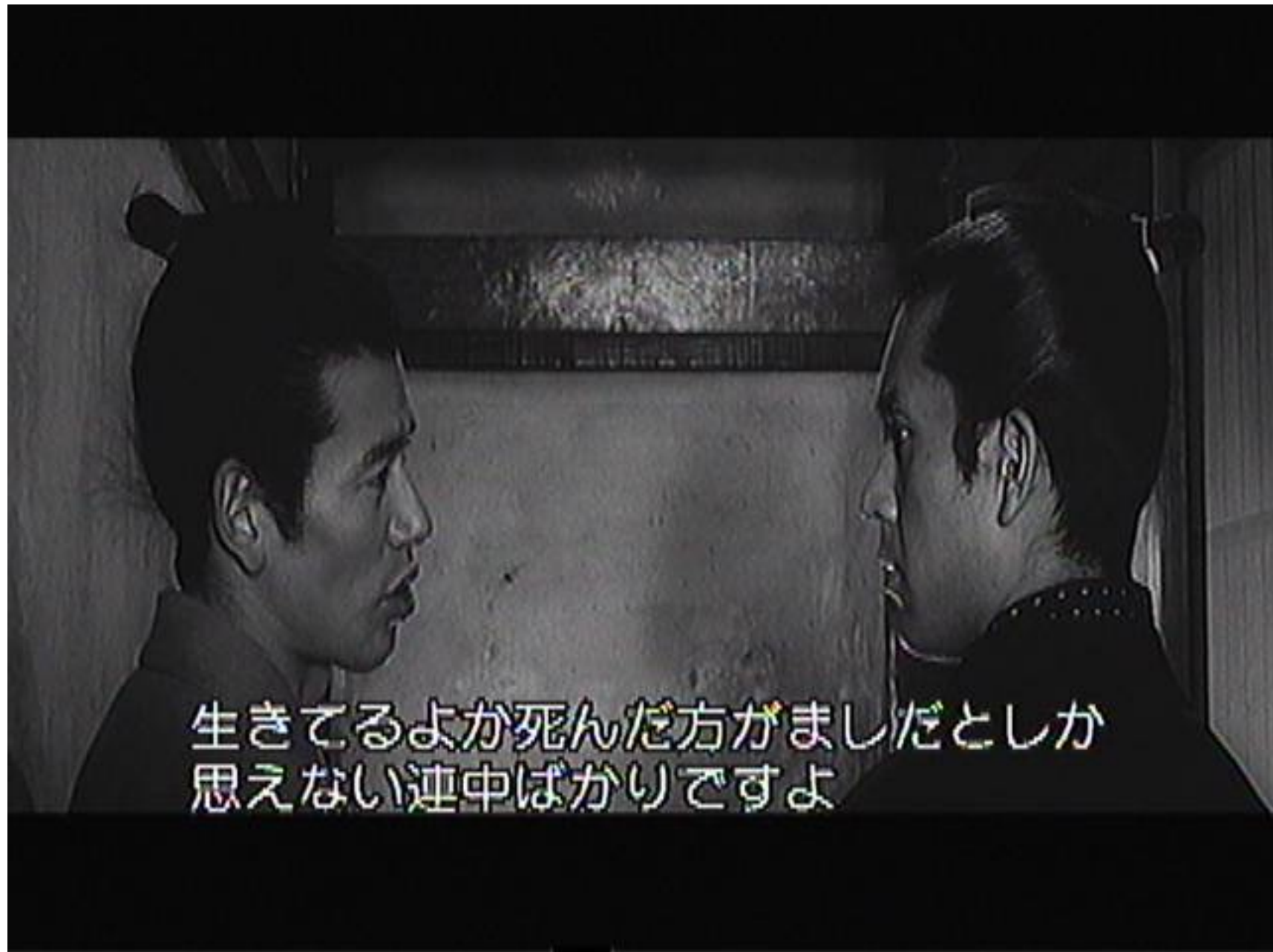


(津川)

ここは通い療治の患者の  
溜まり場なんです



毎日/ 昼過ぎから無料で診察し  
投薬するんですが



生きてるよか死んだ方がましだとしか  
思えない連中ばかりですよ





畳は敷かないんですか

DVD-Video

再生 ▶

この着物はね





汚れがすぐ目立つ



洗うのに手間がかからない



つまり、いつでも身ぎれいに  
していただけるってわけだ



お前もここにへ入ってきた時は  
ゴミ溜めみてえな臭いをしてたが





(佐八)  
畳はね いけねえんだよ



畳はその… 湿気と埃の溜まり場だ




岩物や板敷のことは  
ここの昔からの規則ですか





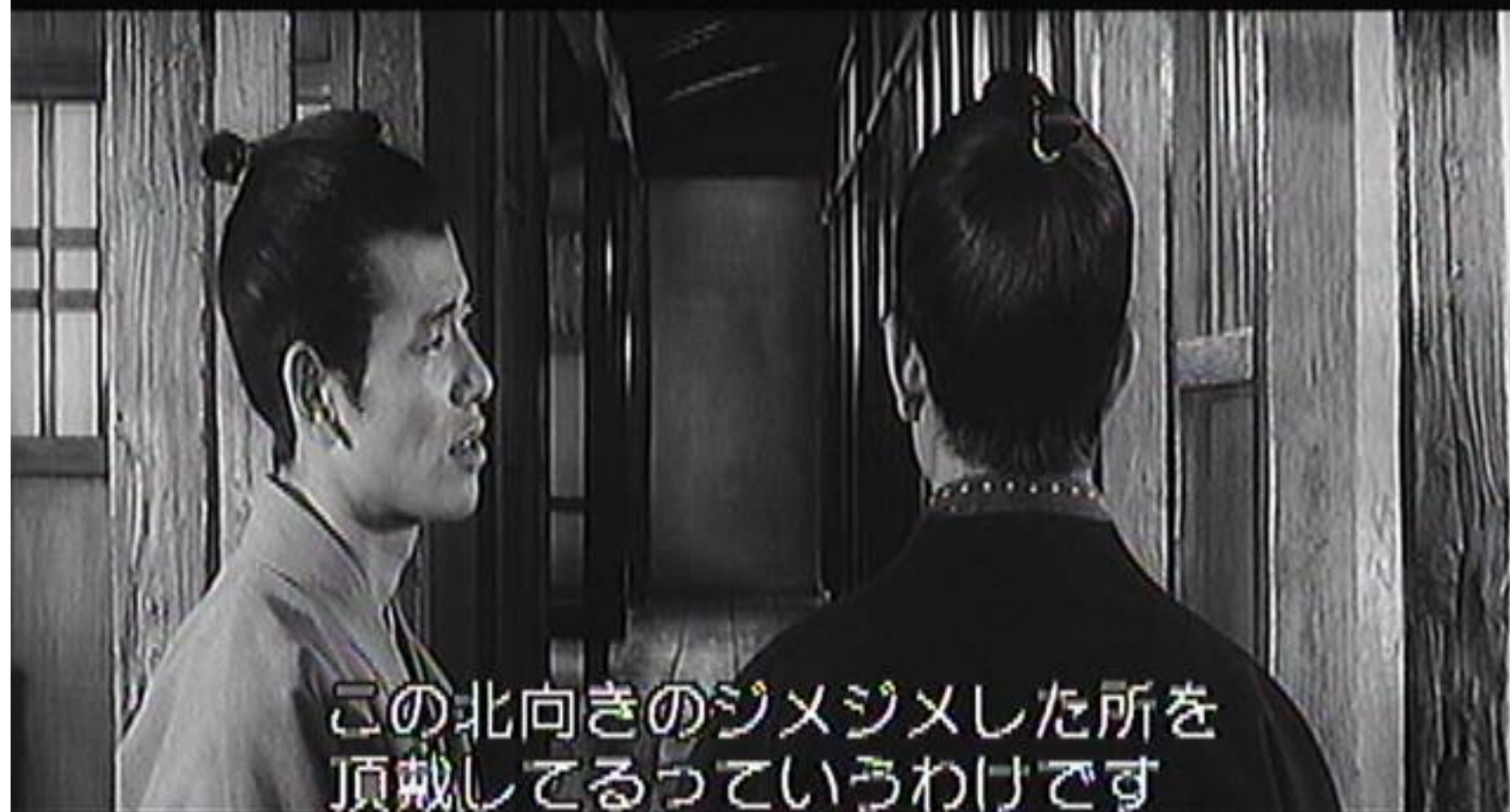
赤ひげ殿のご改革です



治療に関しては熱心でもあるし  
いい腕を持っています




南向きの日当たりのいい場所は  
患者用に回して




この北向きのジメジメした所を  
頂戴してるっていうわけです





お前は今日から見習いとして  
ここへ詰める



それから 長崎遊学中の筆記や  
図録を全部 すぐわしの手元まで出せ



あの建物全体が牢造りになってるんです





娘も一人では決して外へ出しません



何しろ凄いい美人なんですからね

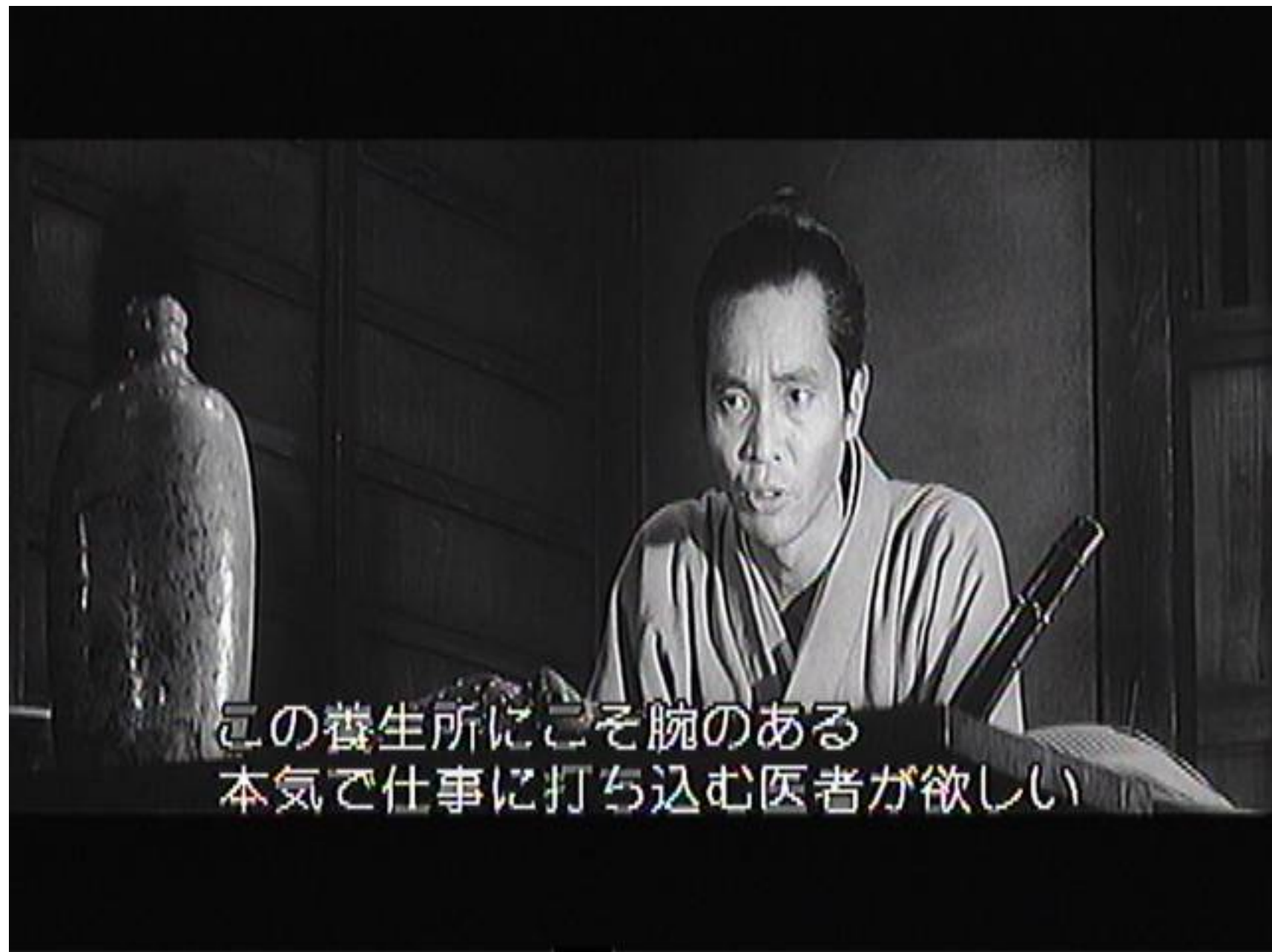




ここの仕事も 打ち込んでみれば  
捨てたものではない



医学は誰のものでもない  
天下のものだ



この養生所にこそ腕のある  
本気で仕事に打ち込む医者が欲しい









男の人にひどいことをされたんです



年寄りの番頭に悪戯をされたんです





かんざし  
私は無我夢中で簪を










簪は動脈をはずれて  
首の後ろの肉を少し裂いただけだ





子供の時 あの娘のような目に遭った  
女なら たくさんいる



それに、男はきれいな女には弱い







もう意識がありません  
半刻はもたないと思います




ダイキリールに発生したものだ



すいもろ  
ダイキリール つまり脾臓は  
動かない臓器だから



痛が発生しても痛みを感じない




痛みを感じる頃は すでに他の臓器に  
痛が広がっている時だ。

ほか







この病例はごく稀だから  
よく覚えておけ



この病気に限らず、あらゆる病気に  
対して、治療法などない。



医者には その症状と経過は分かるし




生命力の強い個体には  
多少の助力をすることが出来る



現在 我々にできることは  
貧困と無知に対する戦いだ



いや、病気の陰には



いつも人間の恐ろしい不幸が  
隠れている

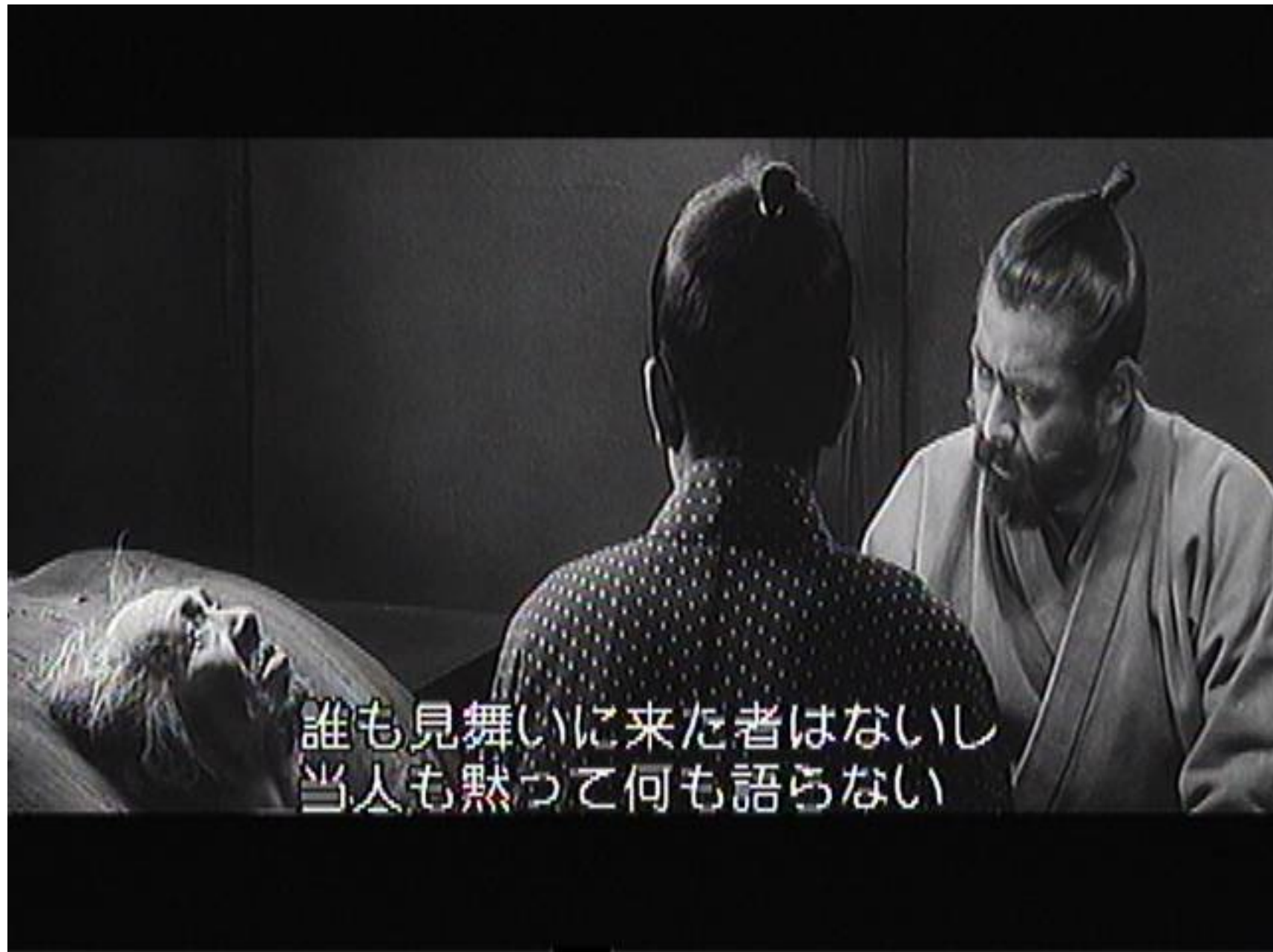


この六助は蒔絵師だった






その道では  
かなり知られた職人だったらしい




誰も見舞いに来た者はないし  
当人も黙って何も語らない



多分 もっと根強い苦しみを  
抱いてるのだろう



先生、ケガ人が担ぎ込まれました  
若い女人足です



普請場で間違いがあつて  
腰と腹に大きなケガをしています



人間の一生で  
臨終ほど荘厳なものはない



それをよく見ておけ











薬は与えてあるが  
暴れるかもしれない



目をそらすな  
傷の縫い方をよく見るんだ




ああっ いかん 腸が出てきた





(森)

私だって初めての手術の時は  
気を失いましたよ




(保本)

いや 臨終だって私は  
赤ひげのようには見られない





死にました  
結局 何にも言わずにね



あなたは荘厳だと思いましたが  
あの六助の死を



私も病人の苦痛や  
死の凄まじさは恐ろしい



でも先生はね 見る目が違うんです





その人間の心も  
診断してしまわれるんです



例えば 六助ですが




あの沈黙の中に 恐ろしい不幸せを  
洞察されたんでしよう





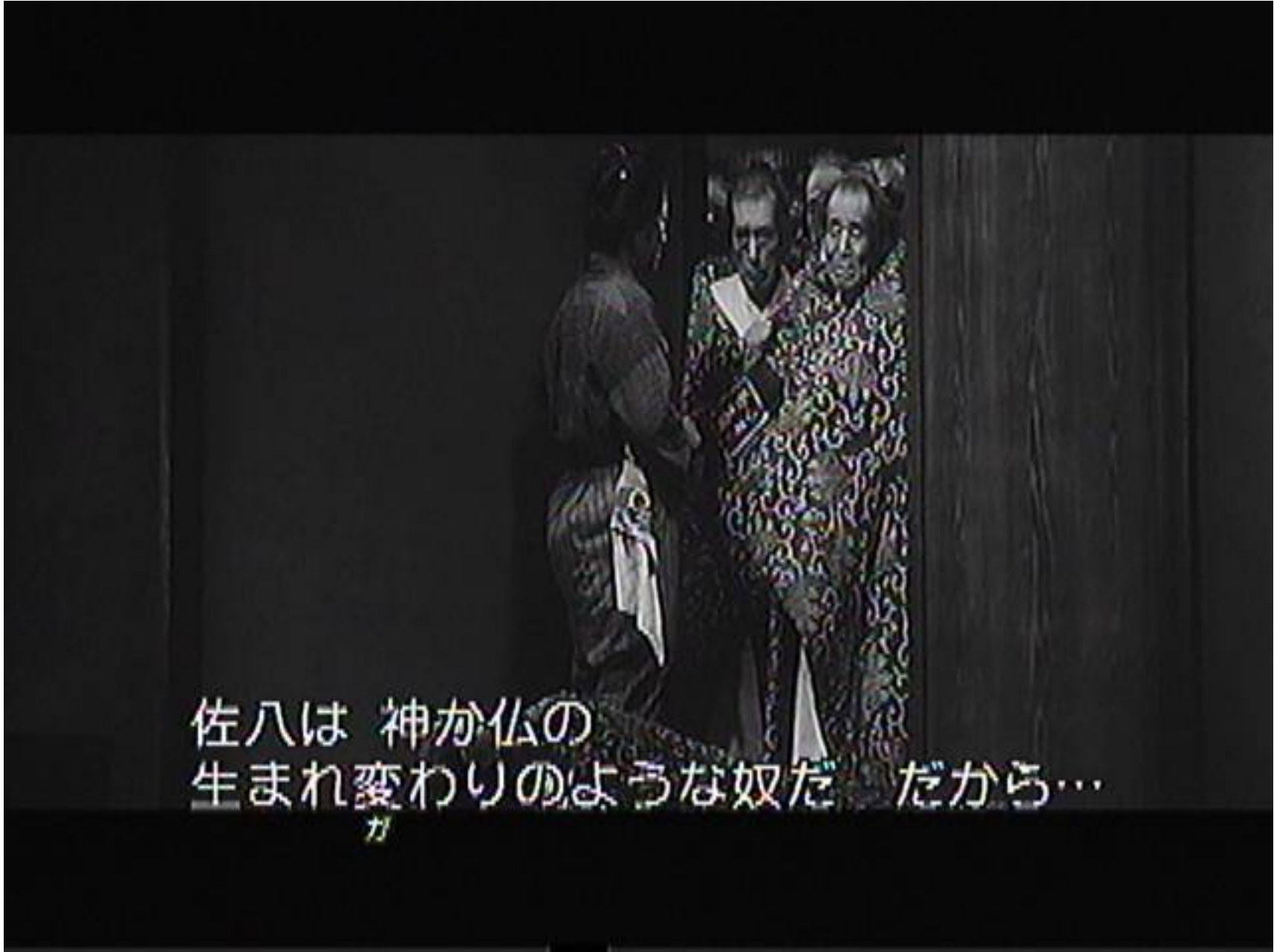
だから その言葉が  
出てきたんだと思います



いつかは先生のあの境地まで  
たどり着きたいと思っ  
てます



佐八 死ぬなよ



佐八は 神か仏の  
生まれ変わりのような奴だ だから…  
が



でも先生は、どうして  
あのお仕着を着ねえんです？



あれは人助けなんですかね



あれを見れば



養生所の先生だということが  
すぐ分かります





医者を呼ぶない言芝人でも



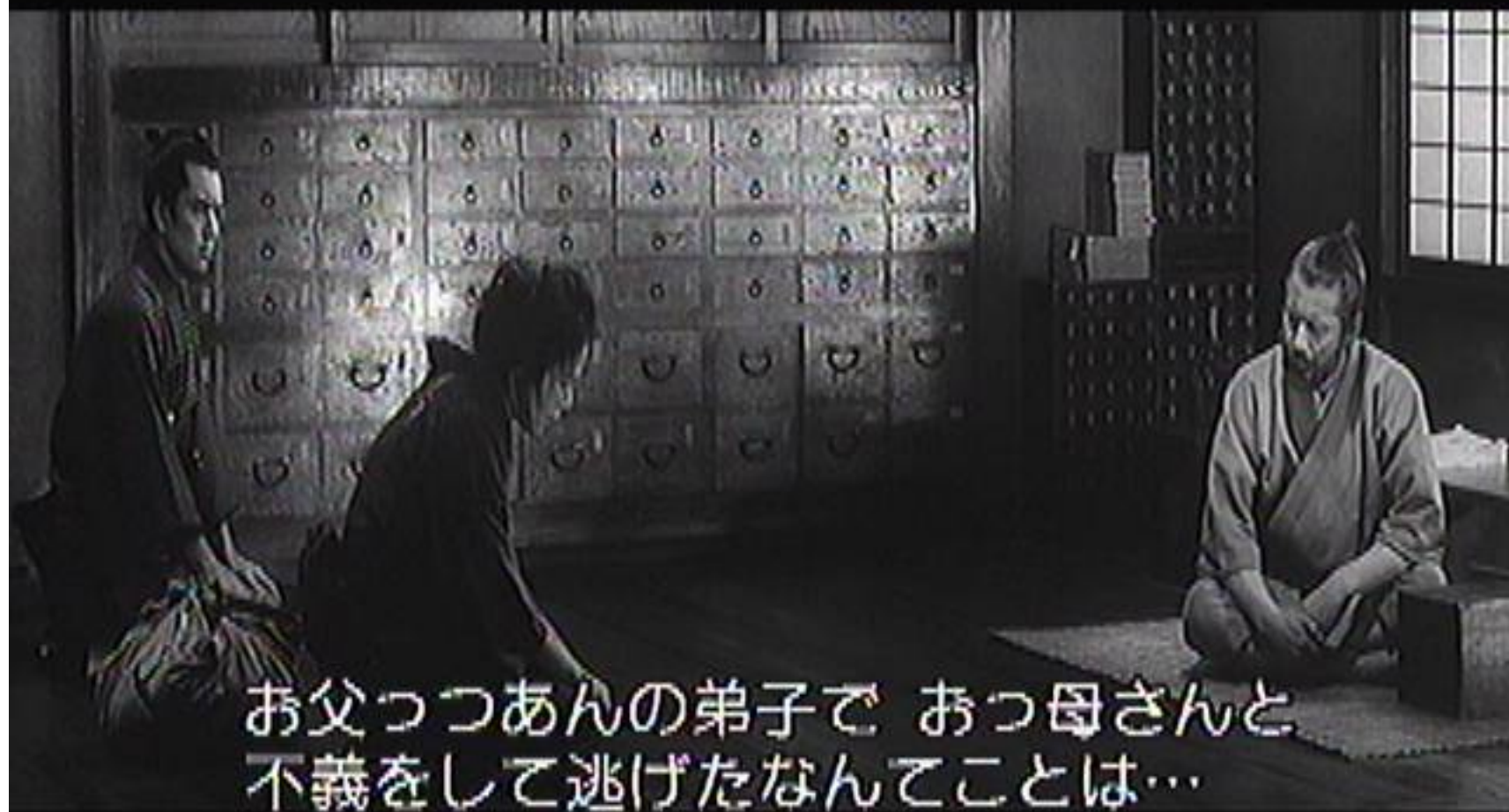
あれを岩だ先生なら、安心して  
寄ってもらえるんで。



死ぬ前に むじな長屋の自分の家まで  
連れてってくれと



あたしは おつ母さんと親類の者だという  
若い男と一緒に住んでたんです



お父っつあんの弟子で おっ母さんと  
不義をして逃げたなんてことは…



あたしがその男と  
夫婦にさせられてからです





おっ母さんは よんじゅう もう四十を過ぎて






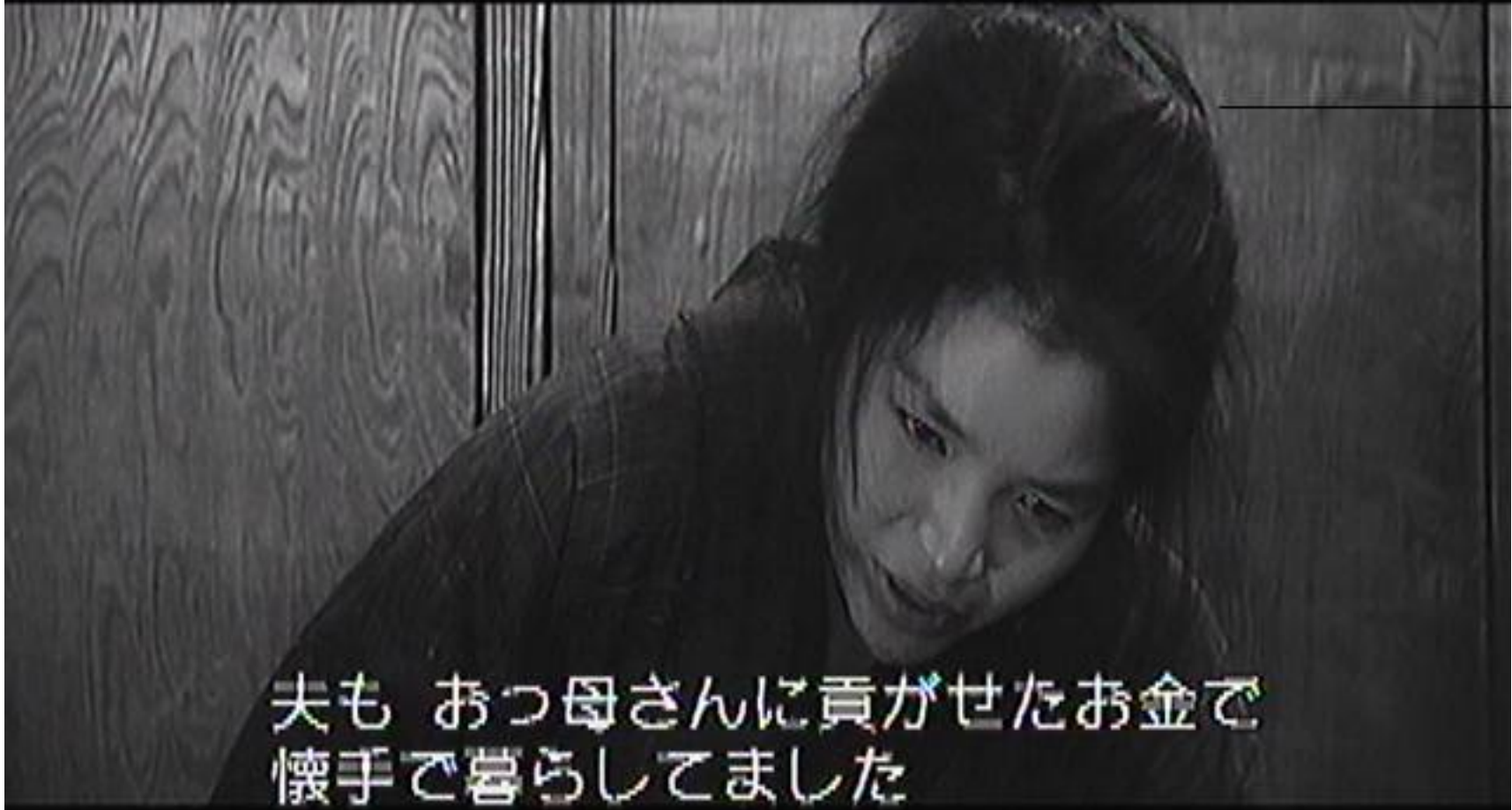
それでもしなければ あの人を  
つなぎ止められなかったんでしょ




死にました




すぐうちを出て 住み込みの  
茶屋奉公に入ったんですが




夫も おっ母さんに貢がせたお金で  
懐手で喜らしてました




おつ母さんは  
死ぬ時 夫を呼びによこしたけど



あたしに会いたいとは  
言いませんでした

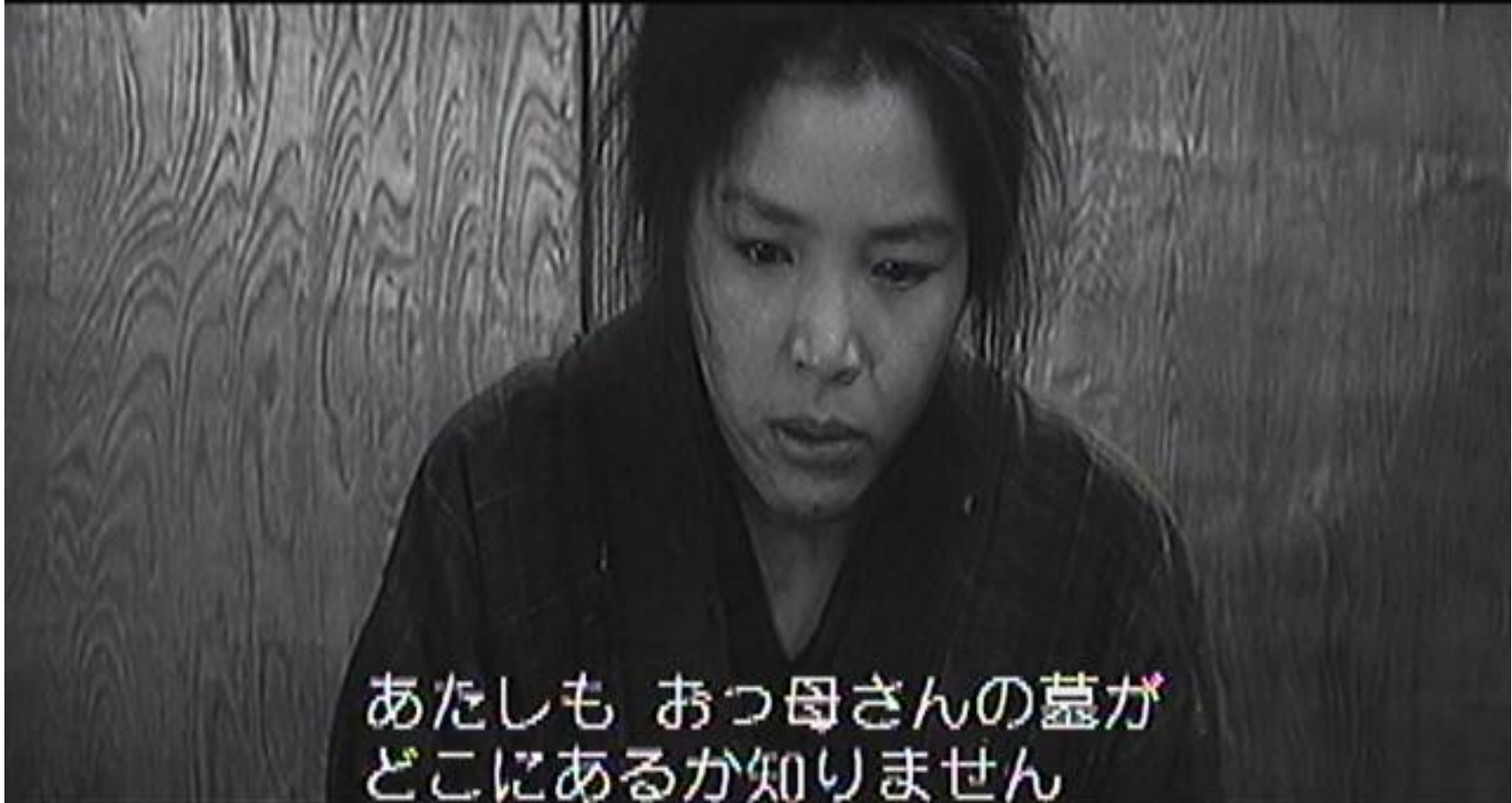


おっ母さんは自分で 自分の男と  
あたしを一緒にしておきながら




私が憎くて憎くて  
仕方がなかったんです





あたしも おっ母さんの墓が  
どこにあるか知りません



その夫との間に三人まで  
子供をこしらえたんですからね





まもなく そつとまた訪ねてきました



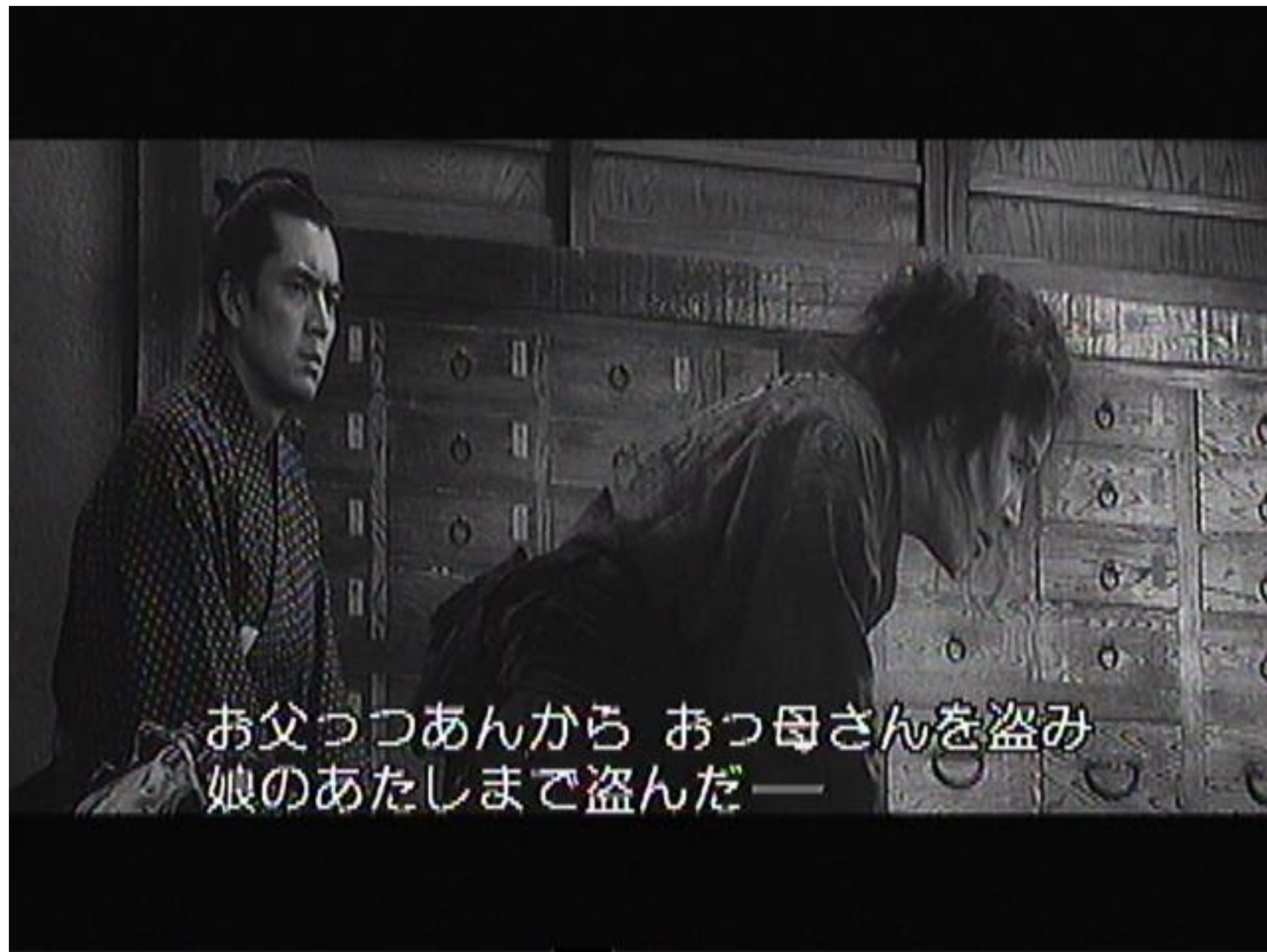
見違えるほど老い込んで



髪の毛も真っ白でした

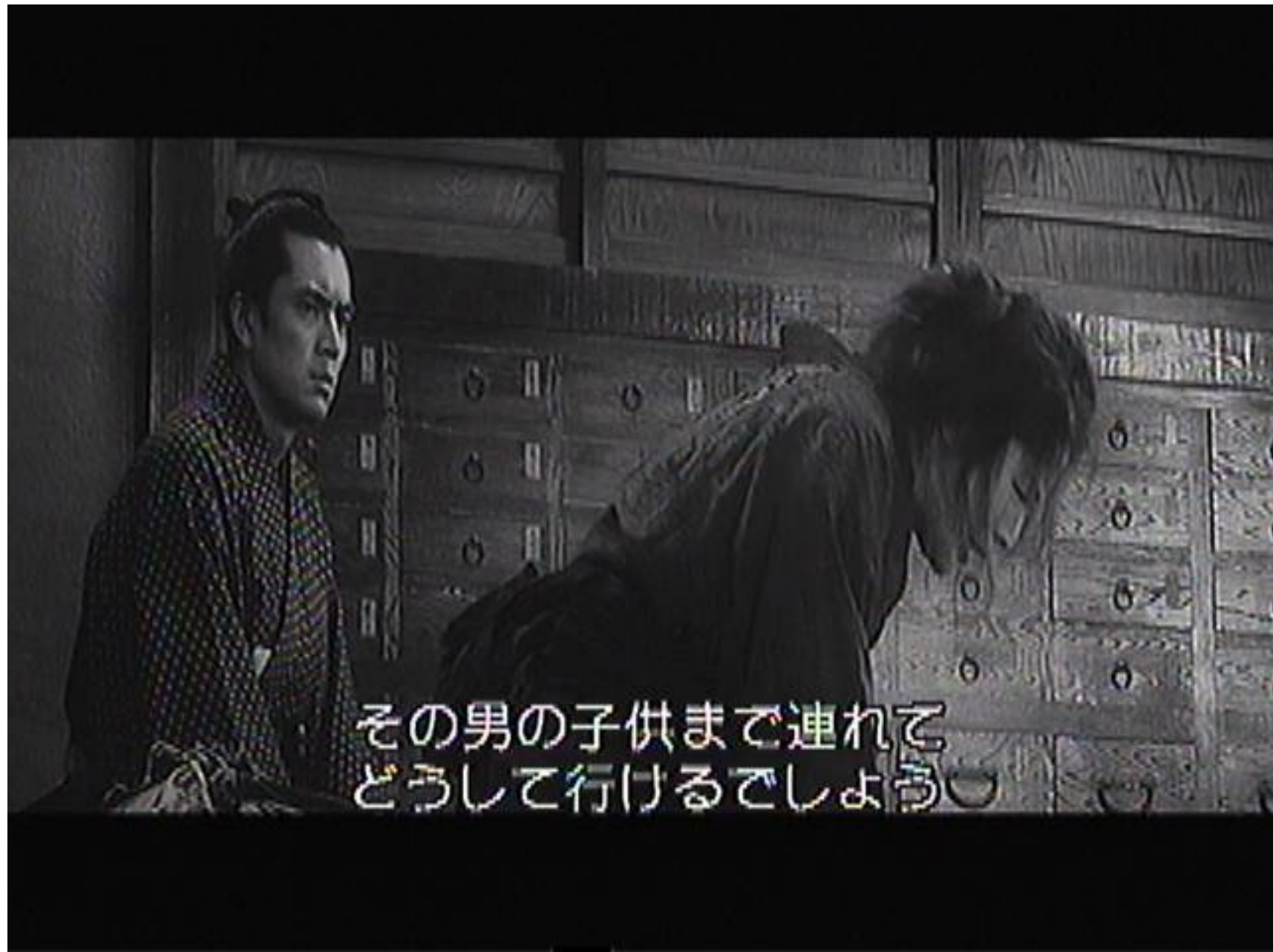


わしと一緒においで  
三人の孫も一緒に連れておいでって




お父っつあんから おっ母さんを盗み  
娘のあたしまで盗んだ—





その男の子供まで連れて  
どうして行けるでしょう



お父っつあん 死ぬ時に  
苦しんだでしよるか



(赤ひげ)

いや 安楽な死に方だった







あたし 子供のために  
じつと我慢しました



それで亭主を刺したといふんだな



腕を刺したくらいでは  
大した罪にはならん






いや これは事故だ



亭主が酒に狂って 包丁を振り回した



それを取り上げようとして  
もみ合っているうちに誤って刺した




いや それに違いない



幸い 北町奉行の島田越後は  
顔見知りだし






(赤ひげ)  
この親子に  
そこを貸してやってくれんか



この金は北町奉行 島田越後から  
召し上げたものだ





実は あの女がすぐ放免になったのも  
みんなわしの卑劣な手段によるものだ



島田は婿で 奥方は家付きの娘だ



ところが島田は  
下戸敷に妾を隠している



しかし この奥方といふのが



何年も前から気鬱の病で | その倍気は  
尋常なものではない

りんご



わしは つまり  
そこでちよつと ほのめかした



島田越後に妾のことをな



わしは実に嫌な奴だ





あの女は放免されて当然だと思ふし



この十両も奥方の治療代だと言えば  
言える



しかし とにかく  
わしは ほのめかした



わしが卑劣だったことに変わりはない



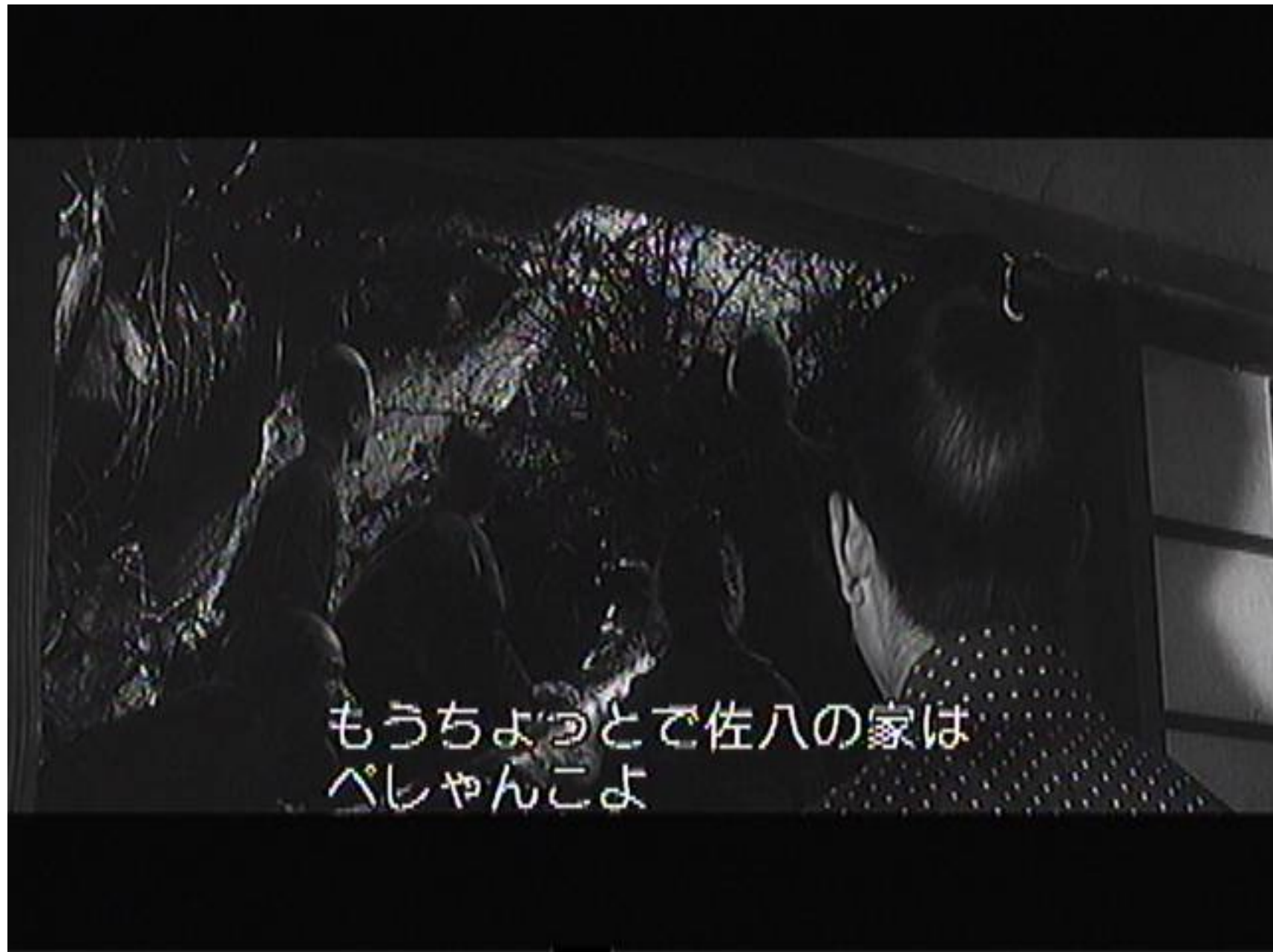
保本



これから もし  
わしが偉そうな顔をしたら



遠慮なく このことを言ってくれ



もうちょっとで佐八の家は  
ペレヤんこよ







あれは 私が埋めたんです



私の女房なんですよ



掛値のねえ自分になって  
死にてえんです

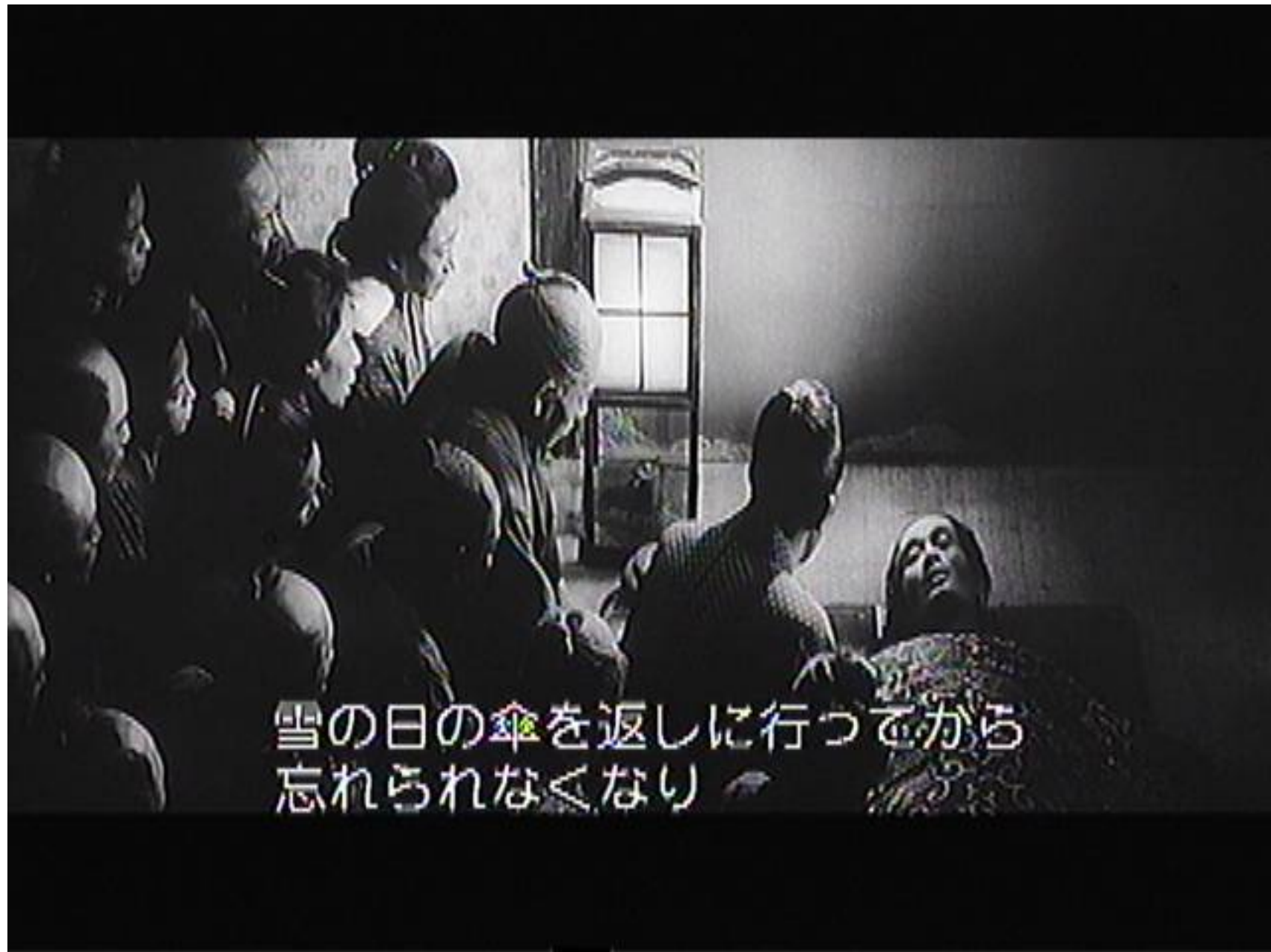


(佐八)

ああ どうせ濡れちまってるんだ



おながといろんですが



雪の日の傘を返しに行つてから  
忘れられなくなり



幾度か入谷の田んぼで会いました






じゃ 一緒になっ<sup>て</sup>くれるんだね



弟や妹が七人もいるし  
お父っつあんは病身だし



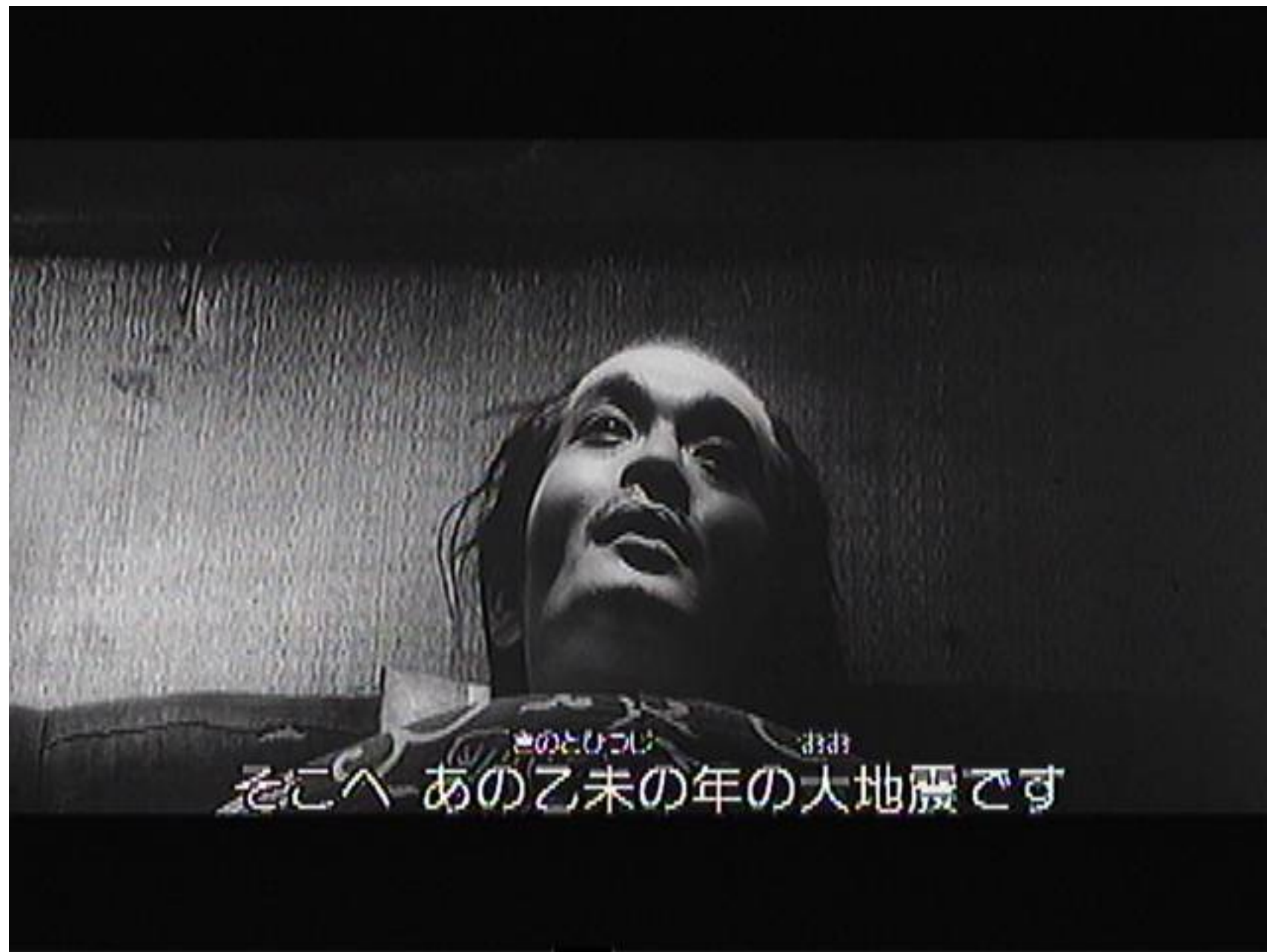
とろとろ目説き落としました




そのまま二人は夫婦になりました



夢みたい幸せでした



きのとひつじ おお  
そこへ あの乙未の年の大地震です



うちの辺りは もう一面の焼け野原で



おなかは消えてしまったんです










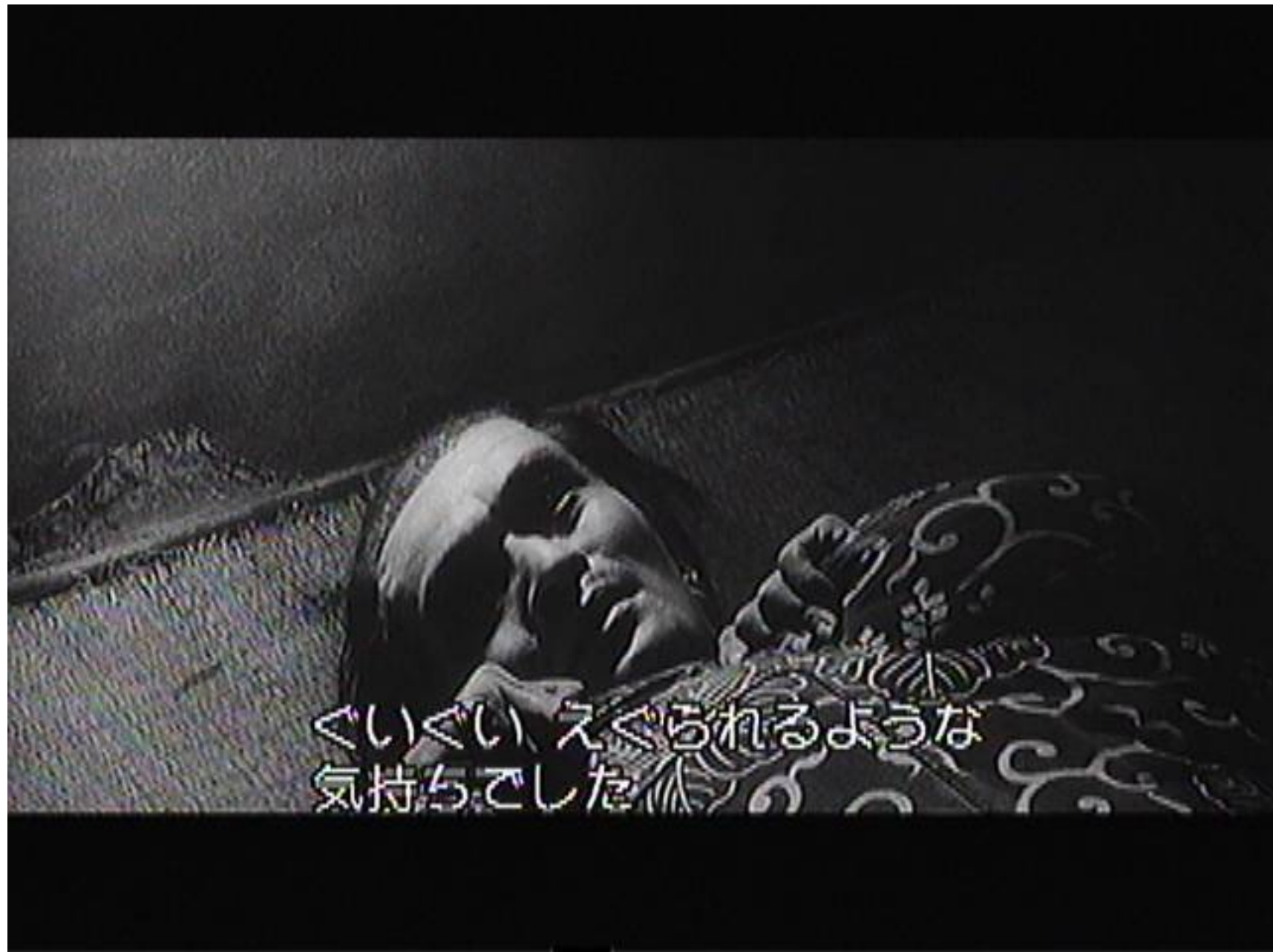
（佐八の声）  
おなかが生きてるなんて



お前の子なんだね



(佐八の声)  
ノミかなんかを胸に突っ込まれて



ぐいぐい えぐられるような  
気持ちでした



自分の女房が他人の子を産んで



目の前でその子に  
乳を飲ましてるといふのに





ただ哀れで 哀れで







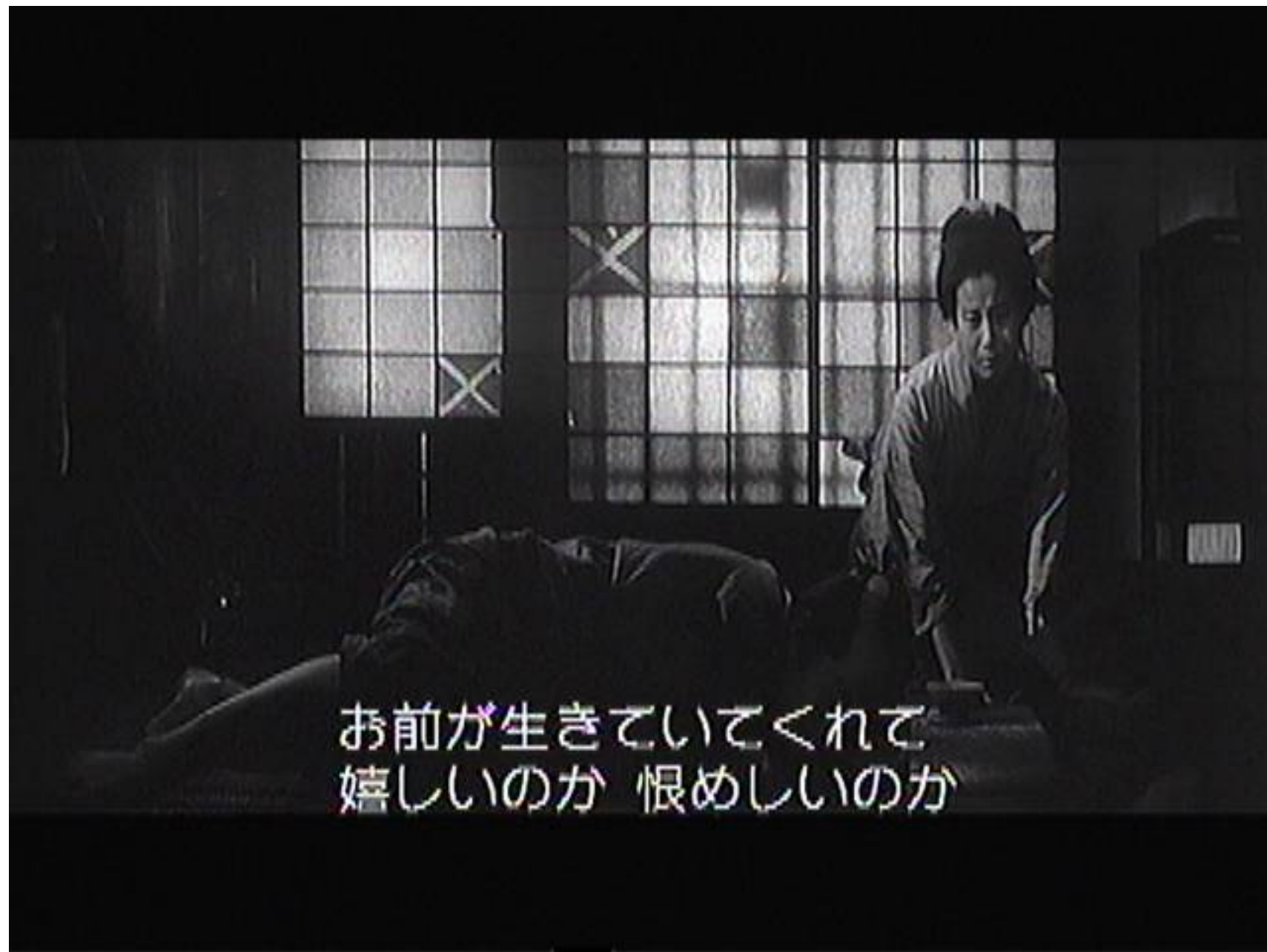
別れた時の振り返ってお辞儀をした姿




それが目に浮かぶと、ただもう哀れで



息が止まりその間に苦しむことになるんです



お前が生きていてくれて  
嬉しいのか 恨めしいのか



あたしには約束した人がいたんです







同じ町内の若い衆で



十六、七の頃から




俺はこのうちの者になるんだからと  
言っでは




稼いだお金をあたしのうちに  
貢いでいた人です




その人は二十歳になると

A black and white film still showing a man and a woman in traditional Japanese attire sitting in a room. The man is on the left, looking down, and the woman is on the right, looking towards him. They are positioned in front of a window with a grid pattern. The scene is dimly lit, with light coming from the window.

はっきり あたしが欲しいと言い  
親も喜んでそれを承知しました




あたし その人が好きでも嫌いでも  
なかったけど




うちにしてもらったことを考えて  
それでもいいと思っていました





その時 あなたに  
会ってしまったんです



親にぶたれても 泣きつかれても  
強情を通しました

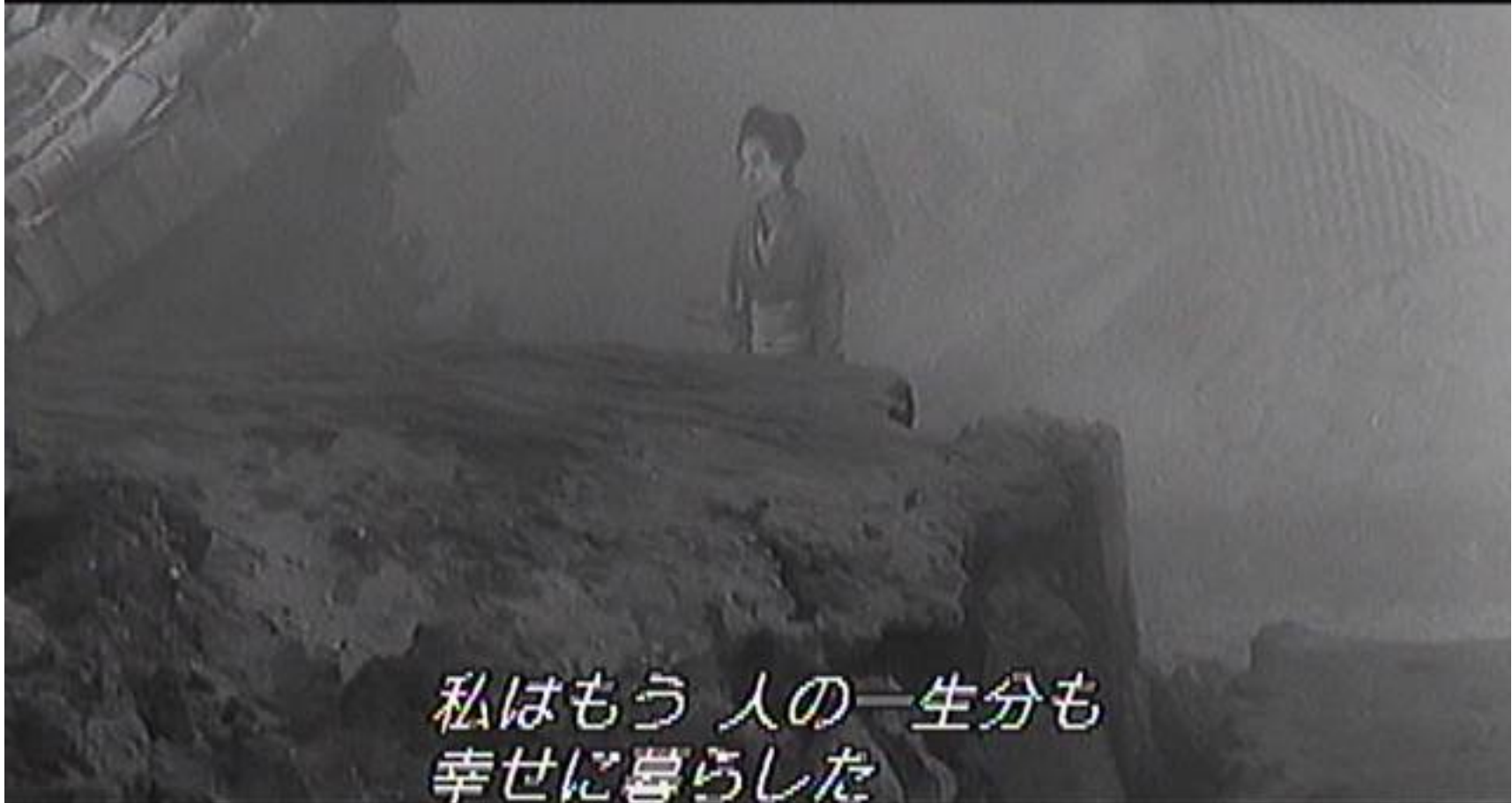


そしてあの地震です

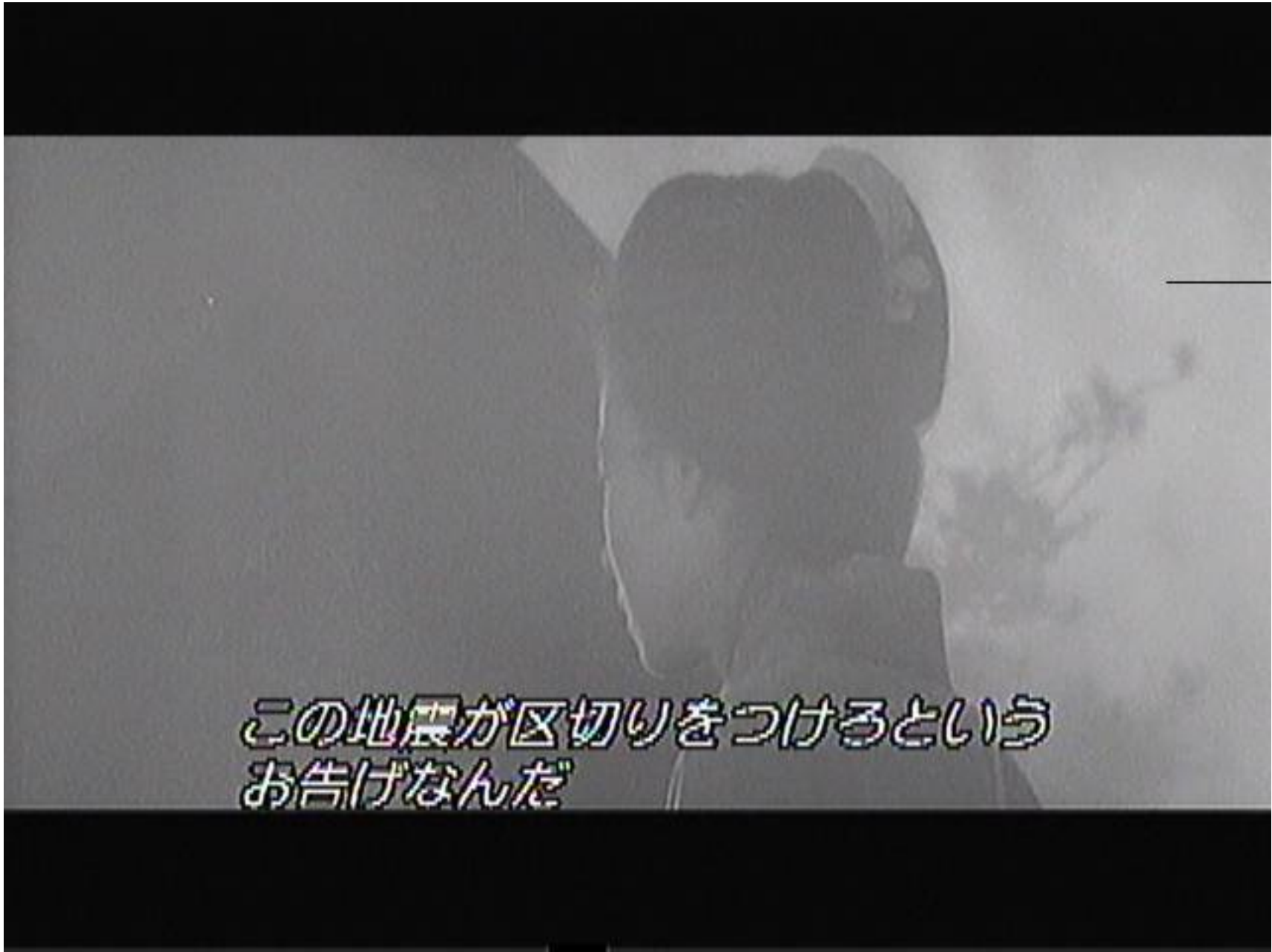




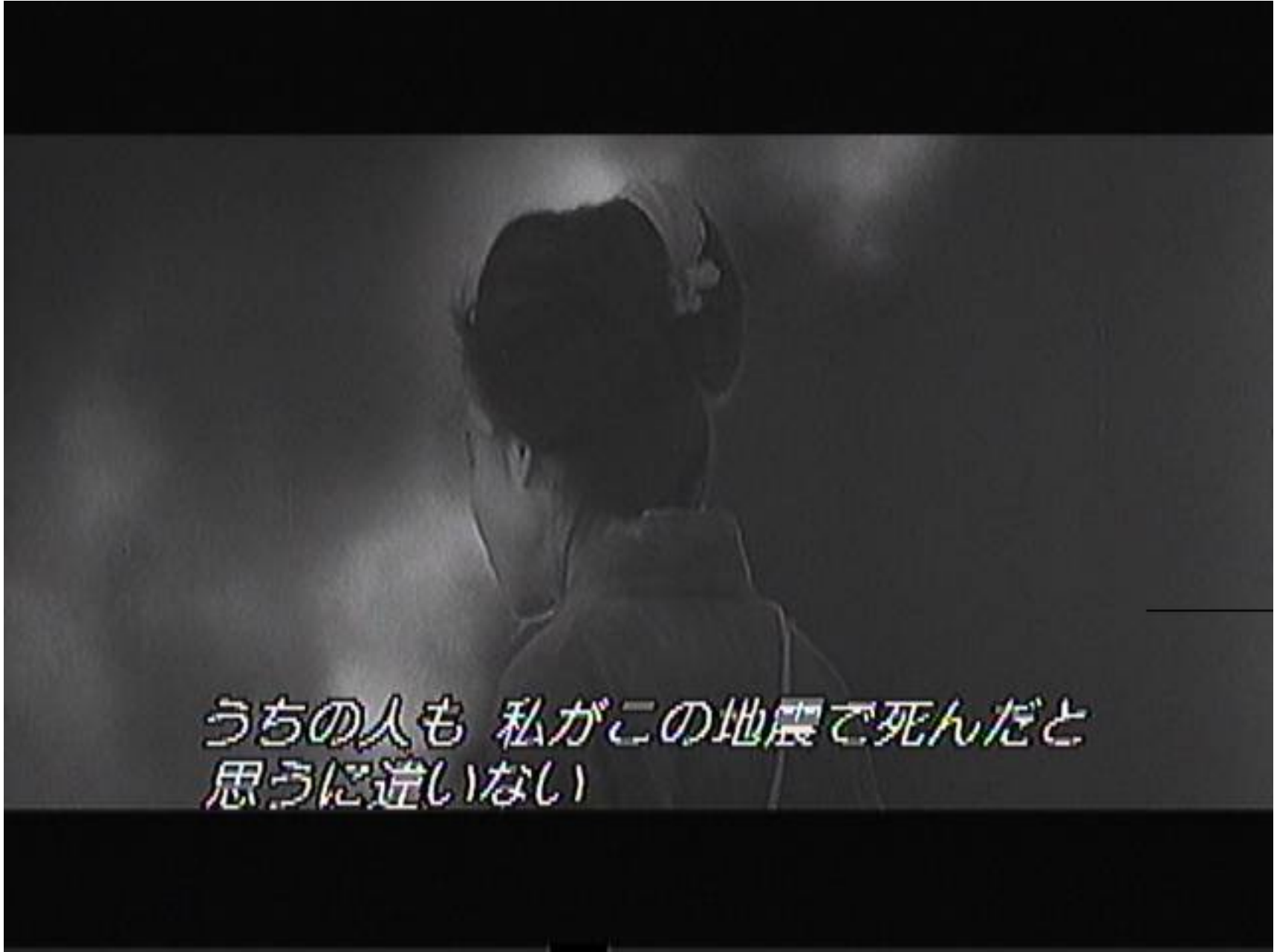
これが罰なんだ



私はもう 人の一生分も  
幸せに喜らした



この地震が区切りをつけるという  
お告げなんだ



うちの人も 私がこの地震で死んだと  
思うに違いない

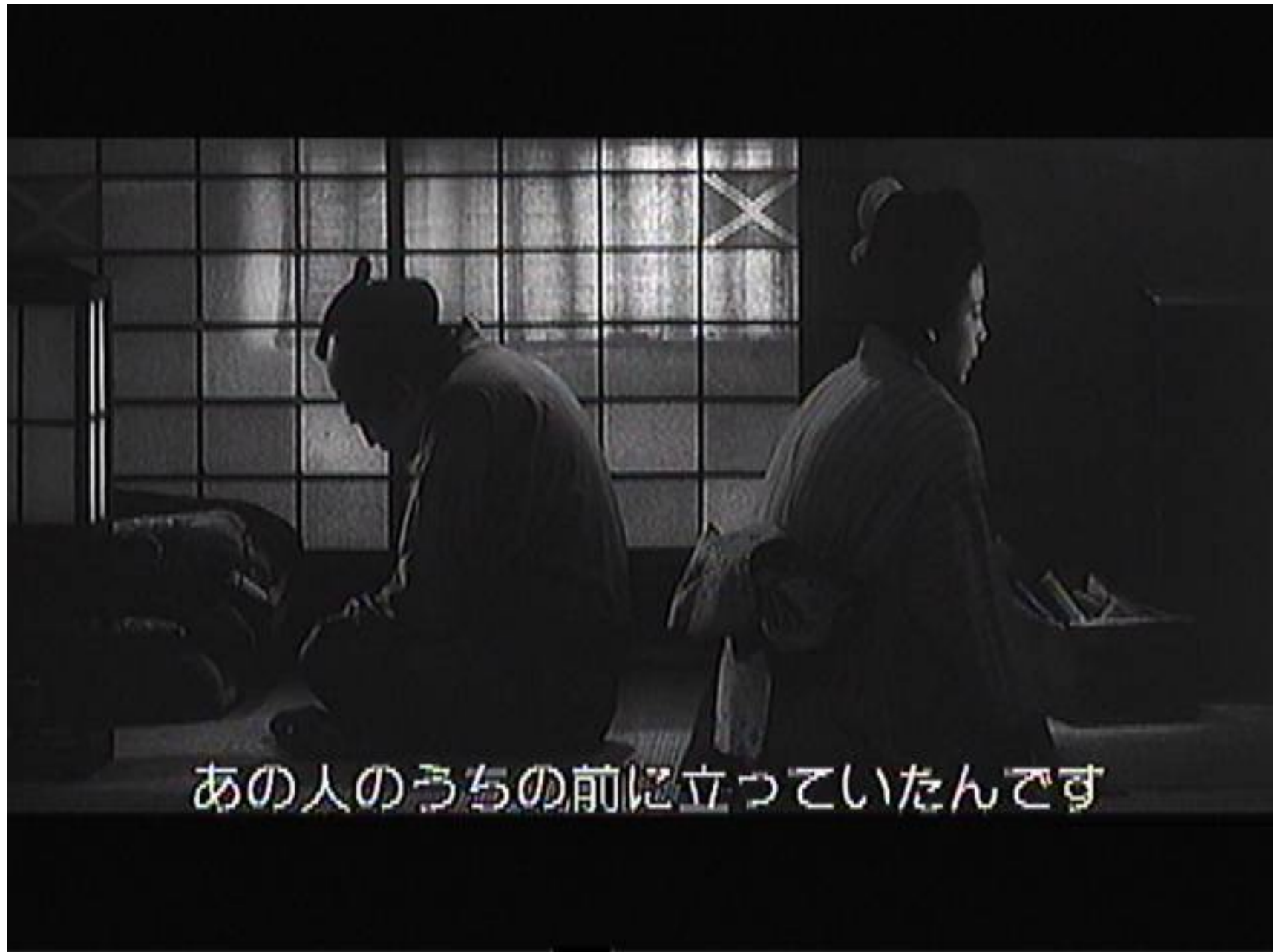




分かるよ… 分かるよ




そろ思い詰めながら ふと気がつくと



あの人のおちの前に立っていたんです



分かるよ... 分かるよ



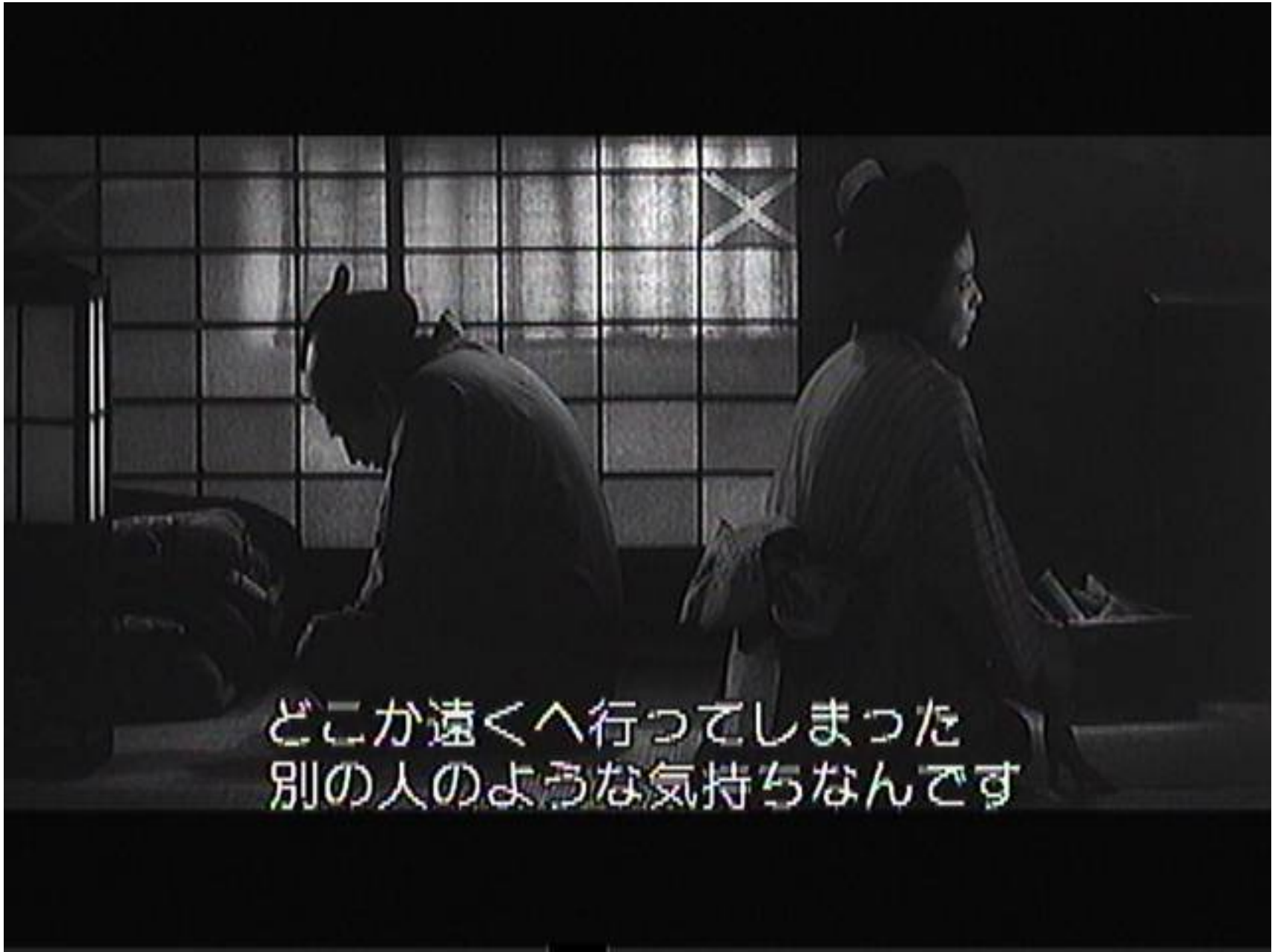
俺にはお前の気持ちか  
手に取るように分かるよ



それから私 ふぬけのようになって

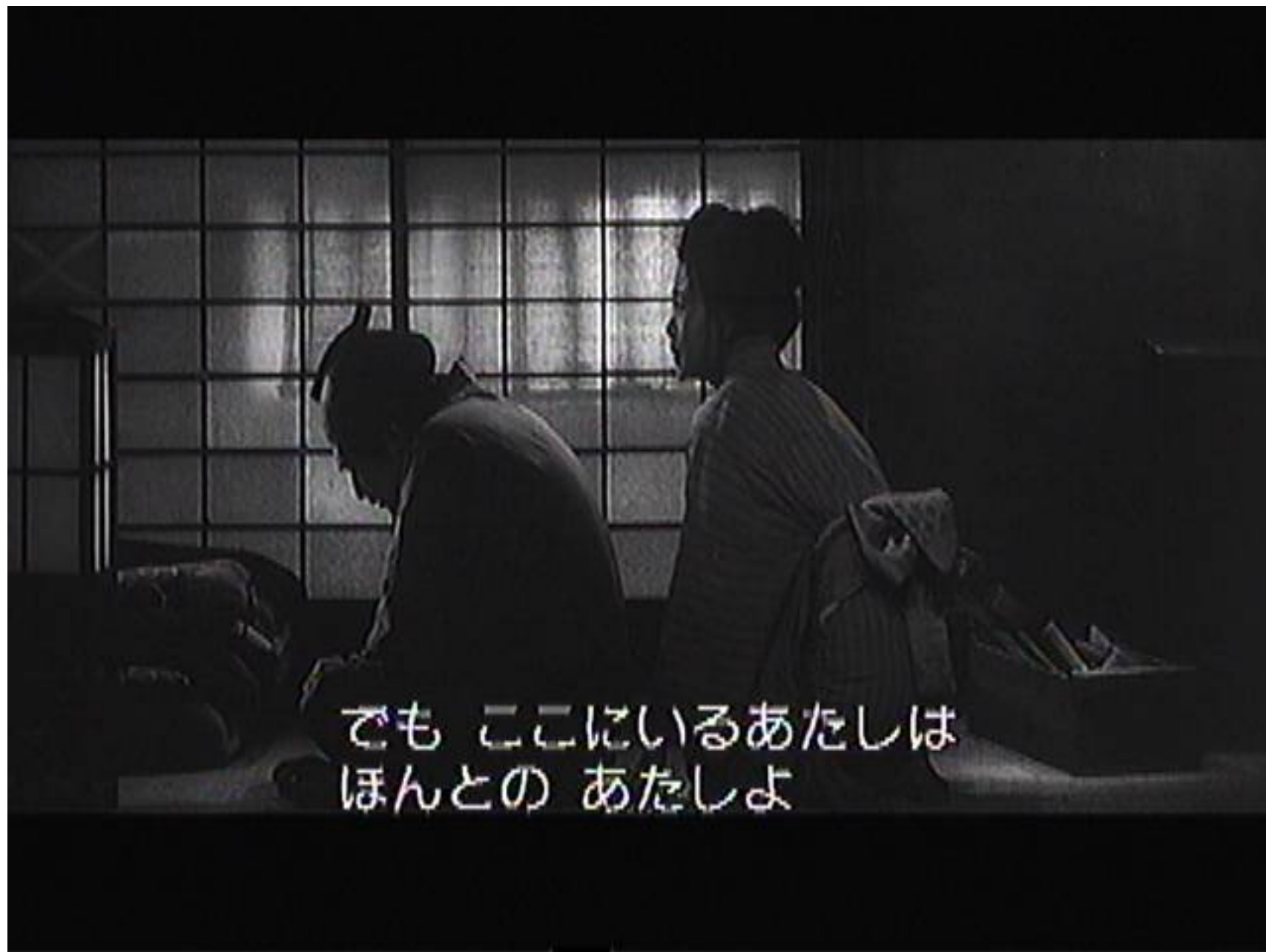


あの人と子供のいる私は

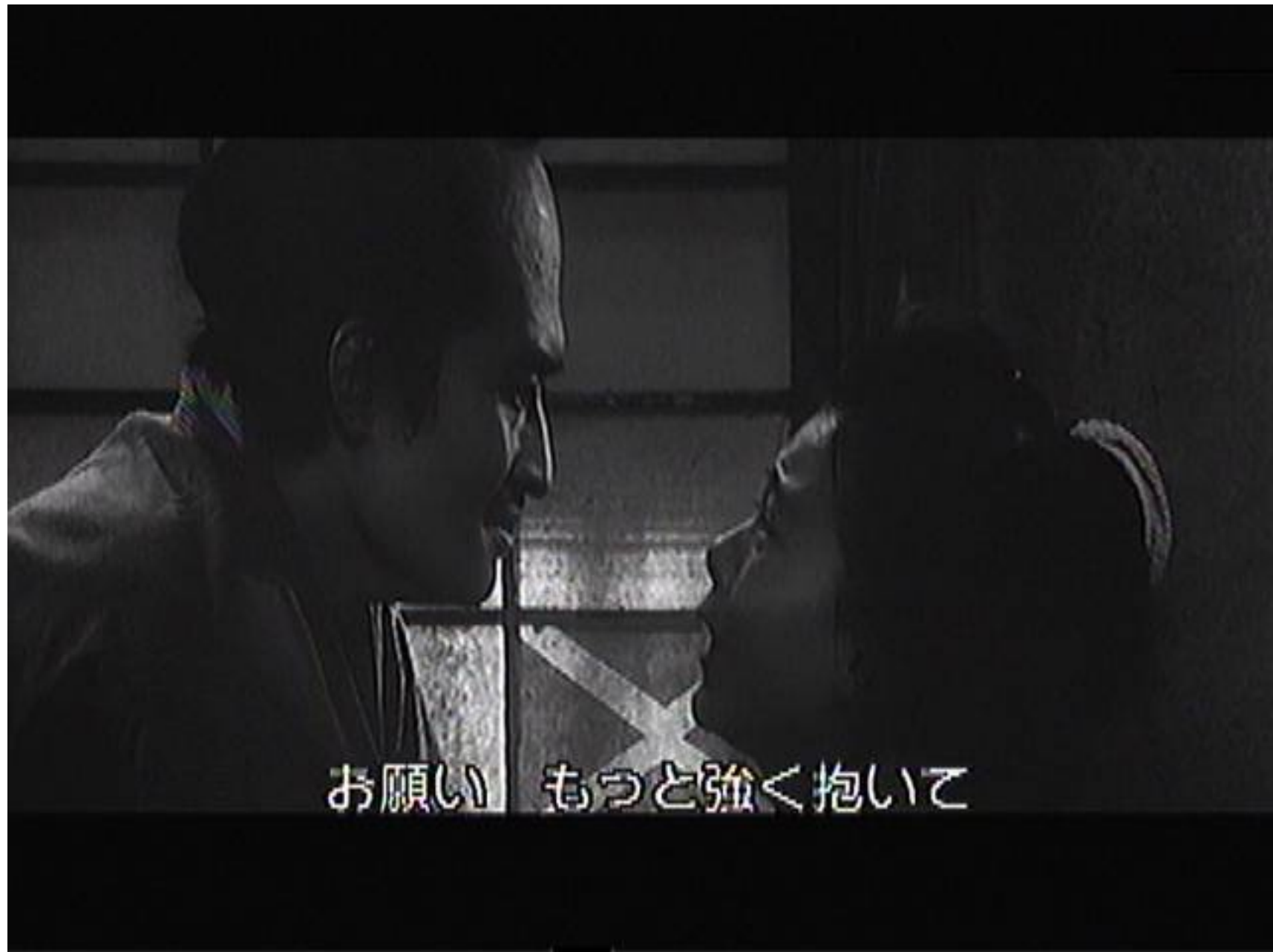


どこか遠くへ行ってしまった  
別の人のような気持ちなんです





でも ここにいるあたしは  
ほんとの あたしよ



お願い もっと強く抱いて









離さないで あたしを離さないで...





私は裏の崖に、おなかを埋めて

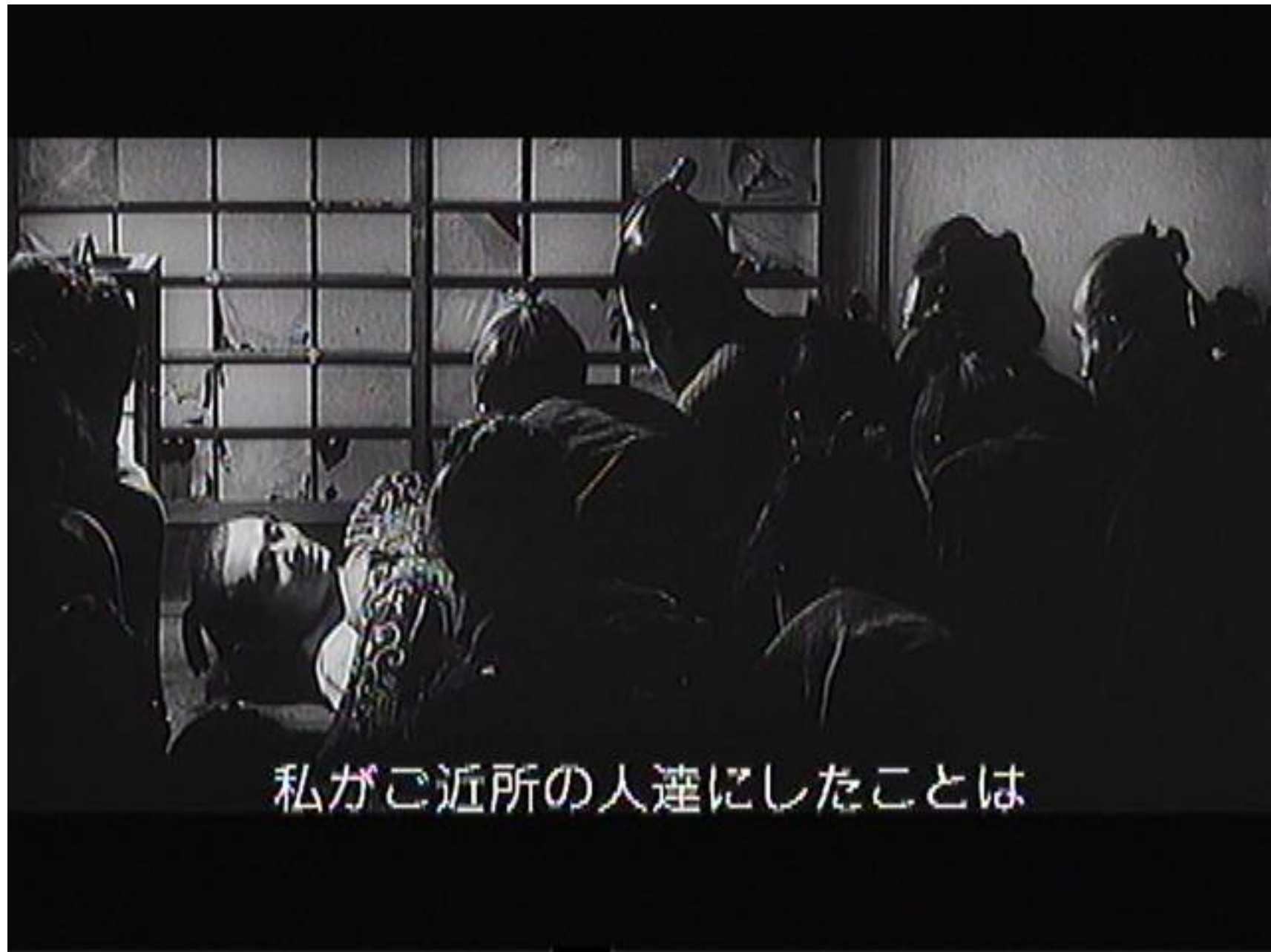




その上に小さな仕事場を作り



ずっとおながと一緒に  
暮らしていたんです



私がお近所の人達にしたことは



みんな おなかに対する供養のためです



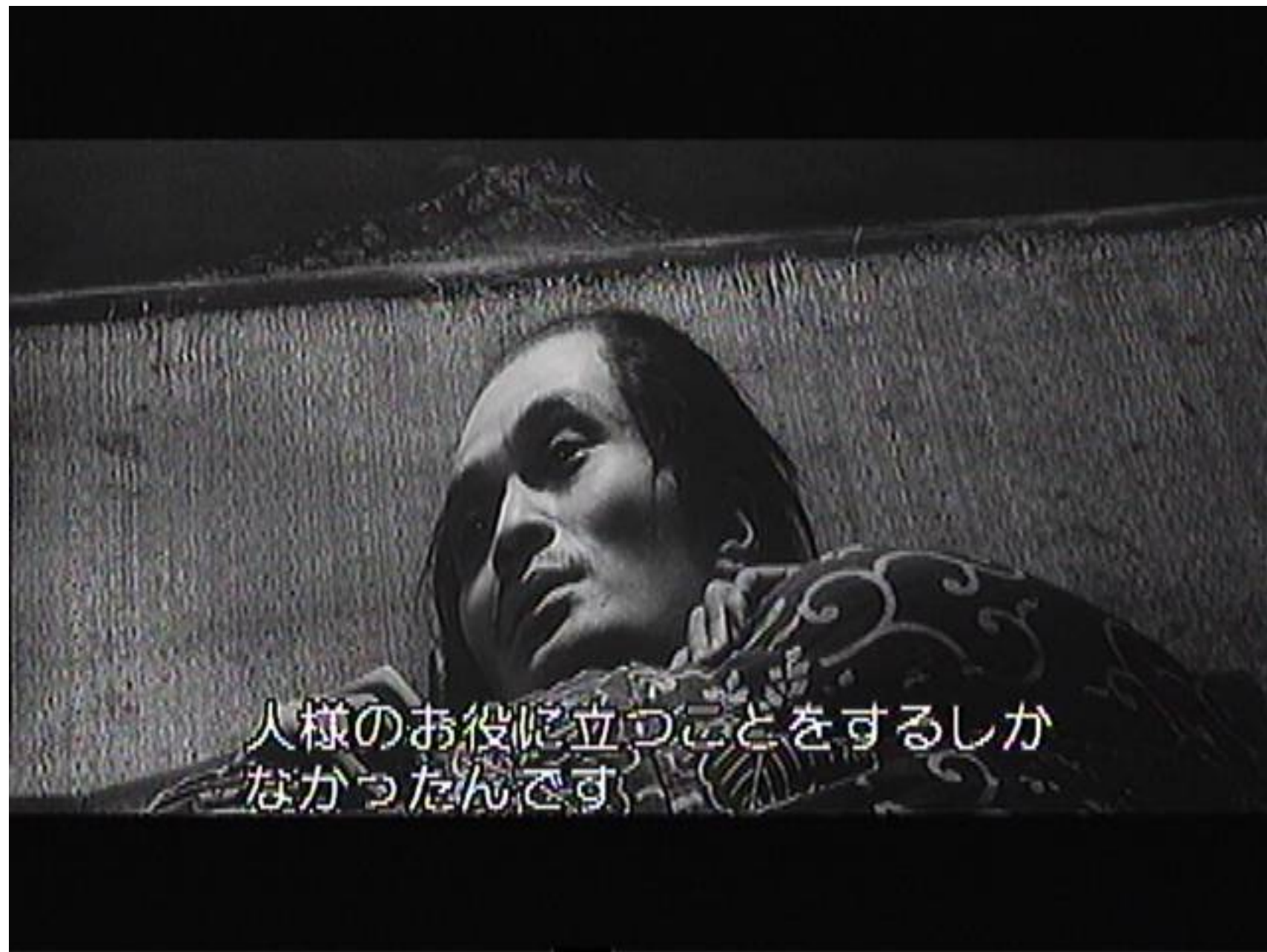
おなかの夫や子供は  
どうしているか知りませんが



この人達にも私は  
悲しい思いをさせているんです



この私にできる せめてもの  
罪滅ぼしは




人様のお役に立つことをするしか  
なかったんです





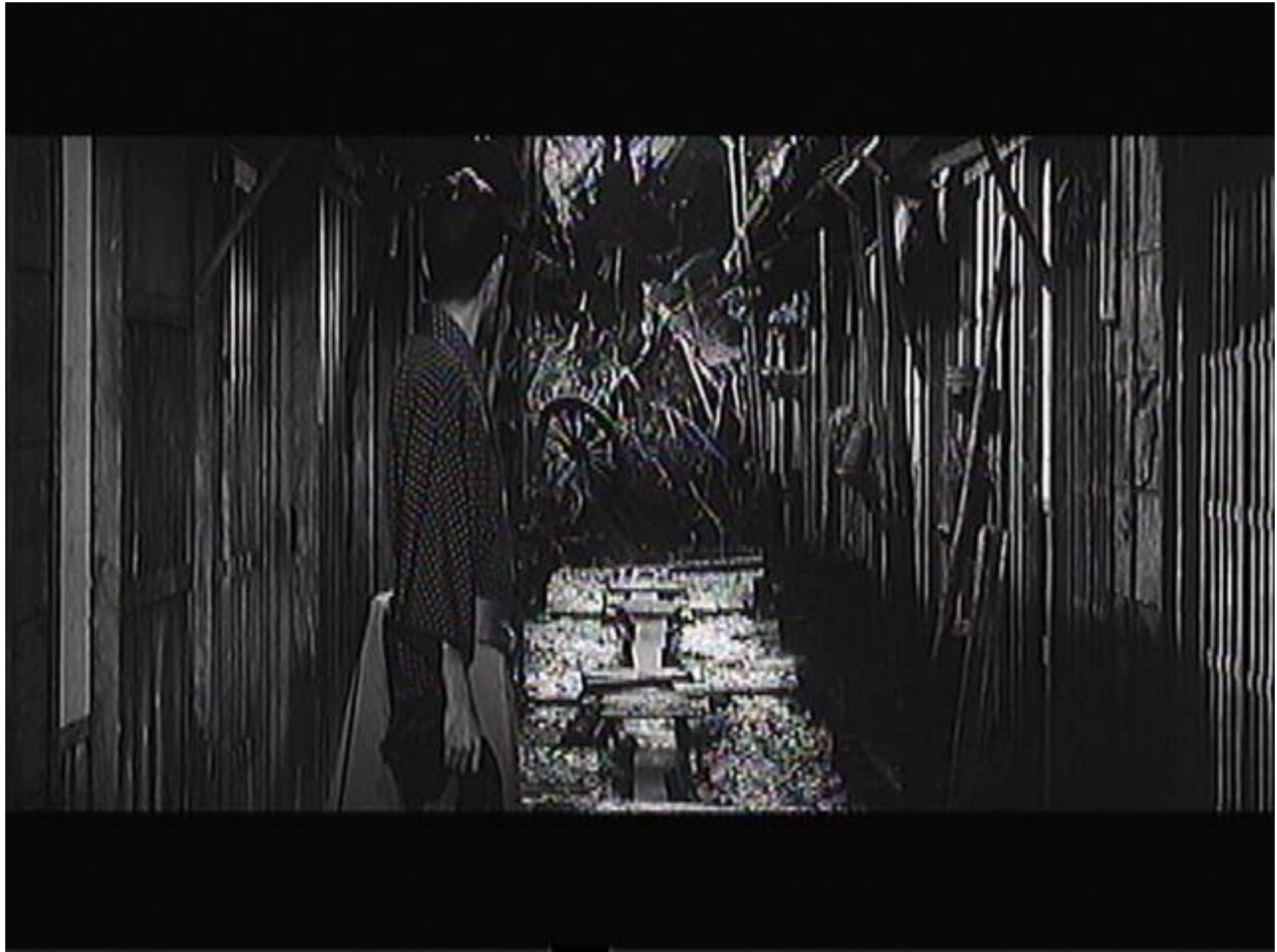
それもやっとおしまいになりました



昨日から(おながか  
何度も迎えに来てくれています



これで やっと三人さりになれます









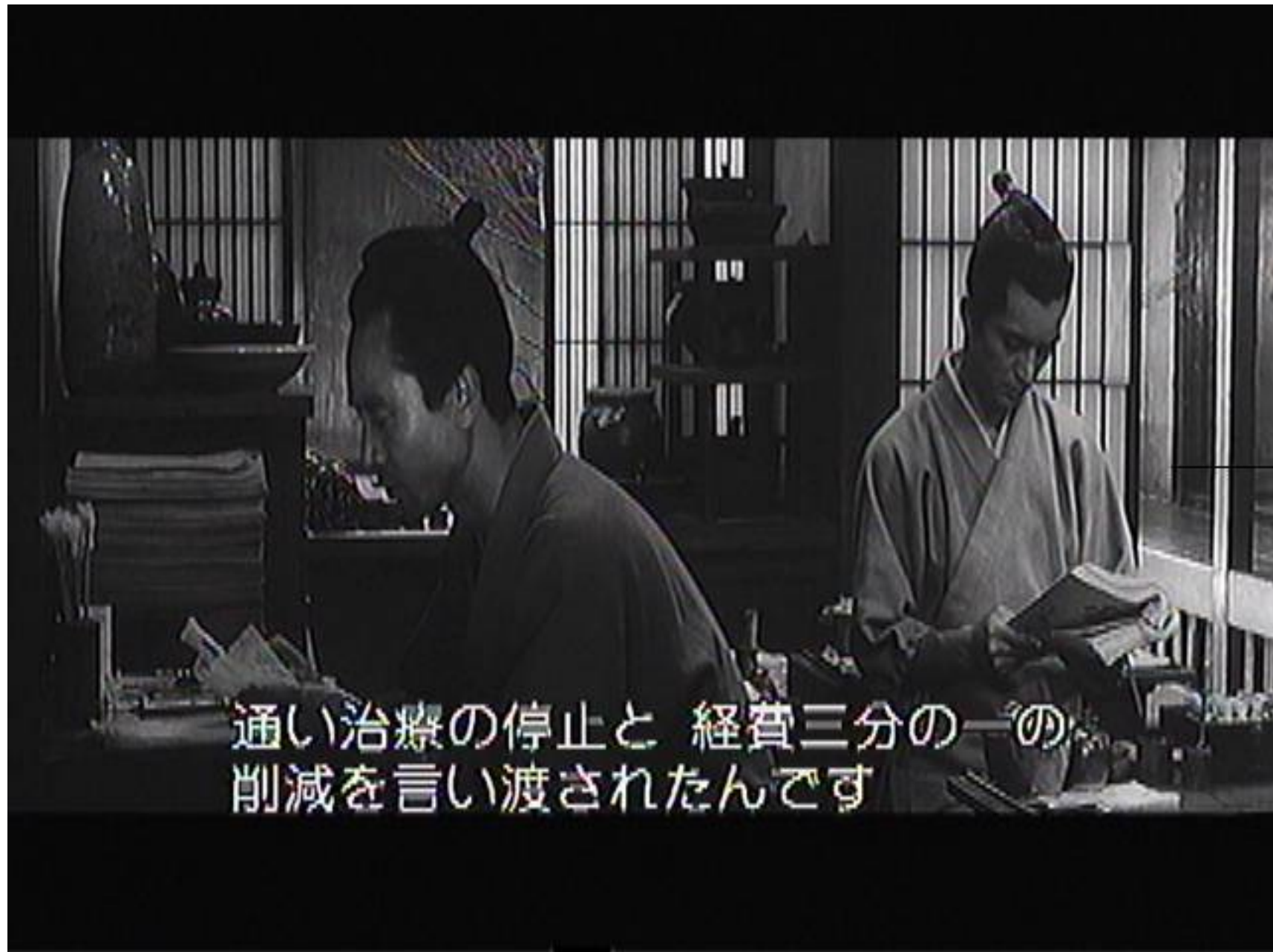
よかったわ  
とうとうお仕着を着たのね



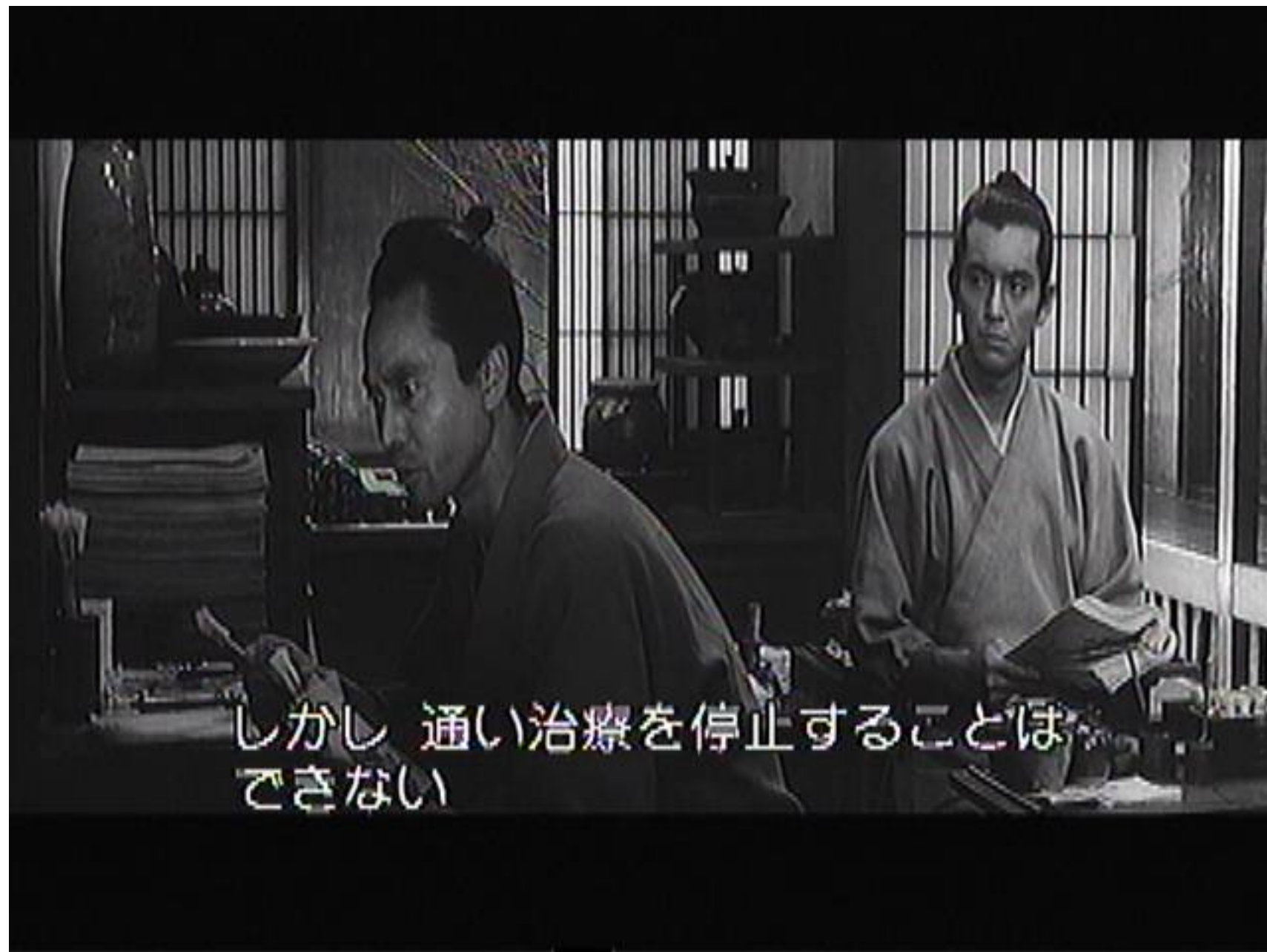
(おたけ)

私もね 赤くなるほど惚れてみたいよ





通い治療の停止と 経費三分の一の  
削減を言い渡されたんです



しかし 通い治療を停止することは  
できない





養生所の先生ですね



じゃ この子を診てやって下さい



寝たつきりの夫の薬札が  
溜まっているんで



いくら頼んでも  
医者が診てくれないんです



はしかだ すぐ養生所へおいでなさい  
もう一っ走りですよ









かねて申し上げた通り  
殿はご病気とは申せません



これはすべて  
贅沢で安逸な生活によるものです



これでは内臓全体に  
脂が溜まって衰弱し



主食は麦七に米三の割で  
一食に一膳



烏肉卵は厳禁




魚介と塩梅も  
指定の量を超えてはなりません





これを向こう百日間お守り下さい



ところで、御家老  
今日の薬礼を頂きたい



五十両



(徳兵衛)  
三十両… ございましたかな





医者は生死のことにあずからず  
ということが あるそうでございますな



治る病人は治る 死ぬ病人は死ぬ  
医者を知ったことではない

和久松屋

(徳兵衛)  
すると やぶ医者も名医も差別はない





高い業も 町で売る売業も同じことだ  
というわけになるのでしょうか？



ああ もちろん 新出先生のような  
ご高名な方は別としてですが



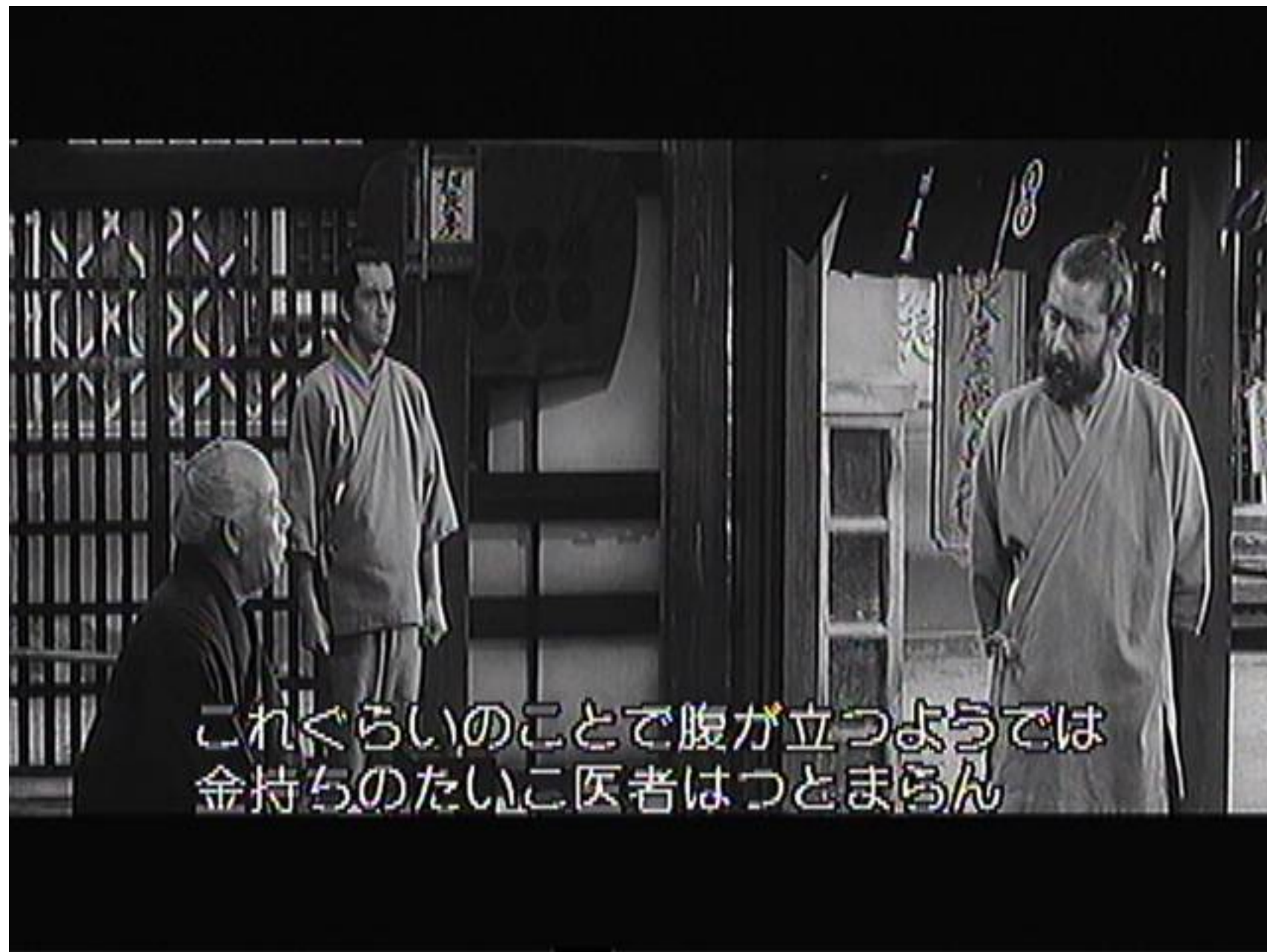
わしを別にすることはない  
遠慮はいらん



他にもつと言いたいことがあれば  
何でも言え



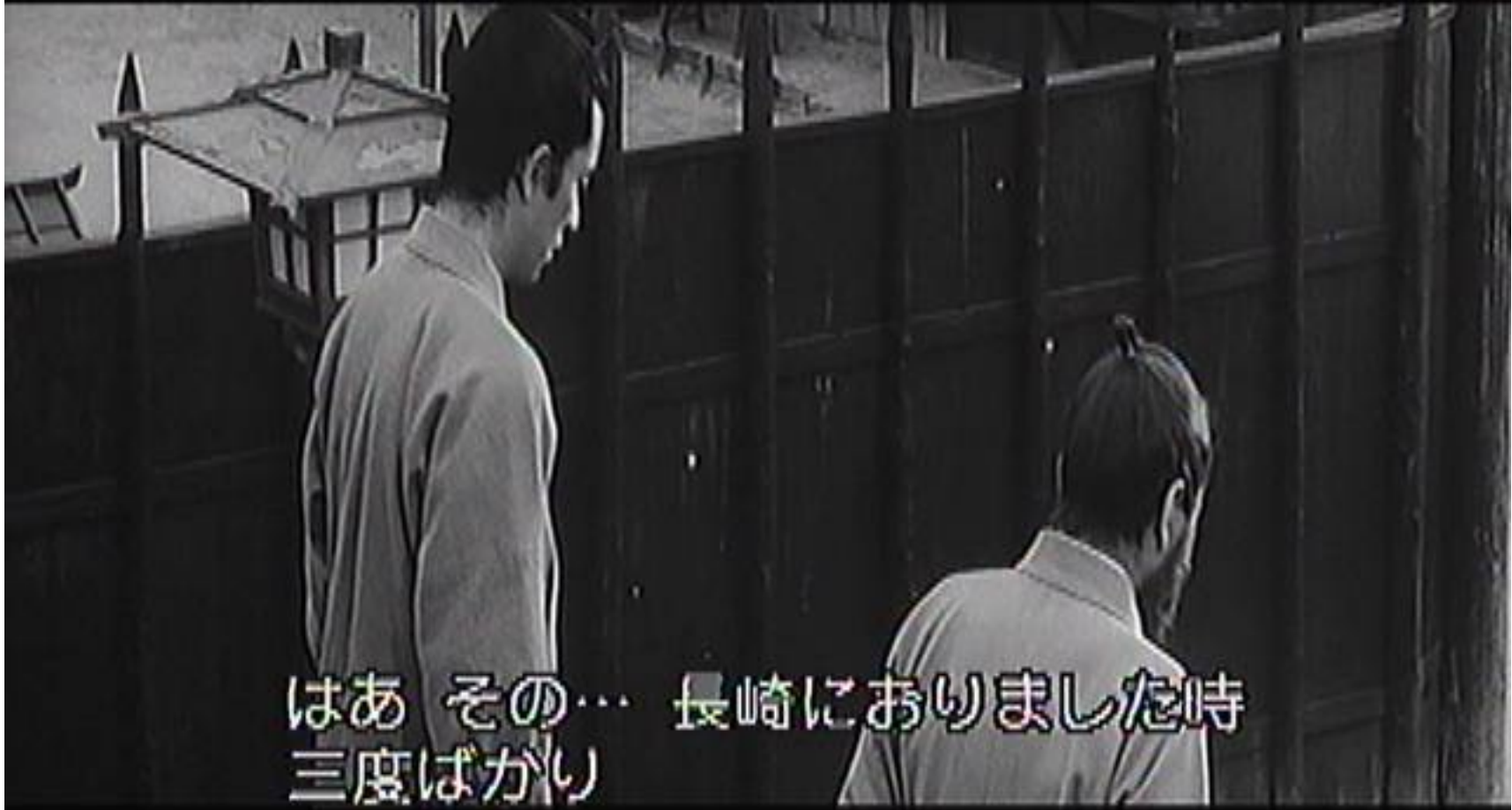
はっ、これはどうも、ご機嫌を  
損ねたようでございますな



これぐらいのことで腹が立つようでは  
金持ちのたいこ医者はずとまらん



保本は こういう岡場所のたぐいに  
足を踏み入れたことがあるか



はあ その… 長崎におりました時  
三度ばかり





学友に誘われて遊びに行っただんですが

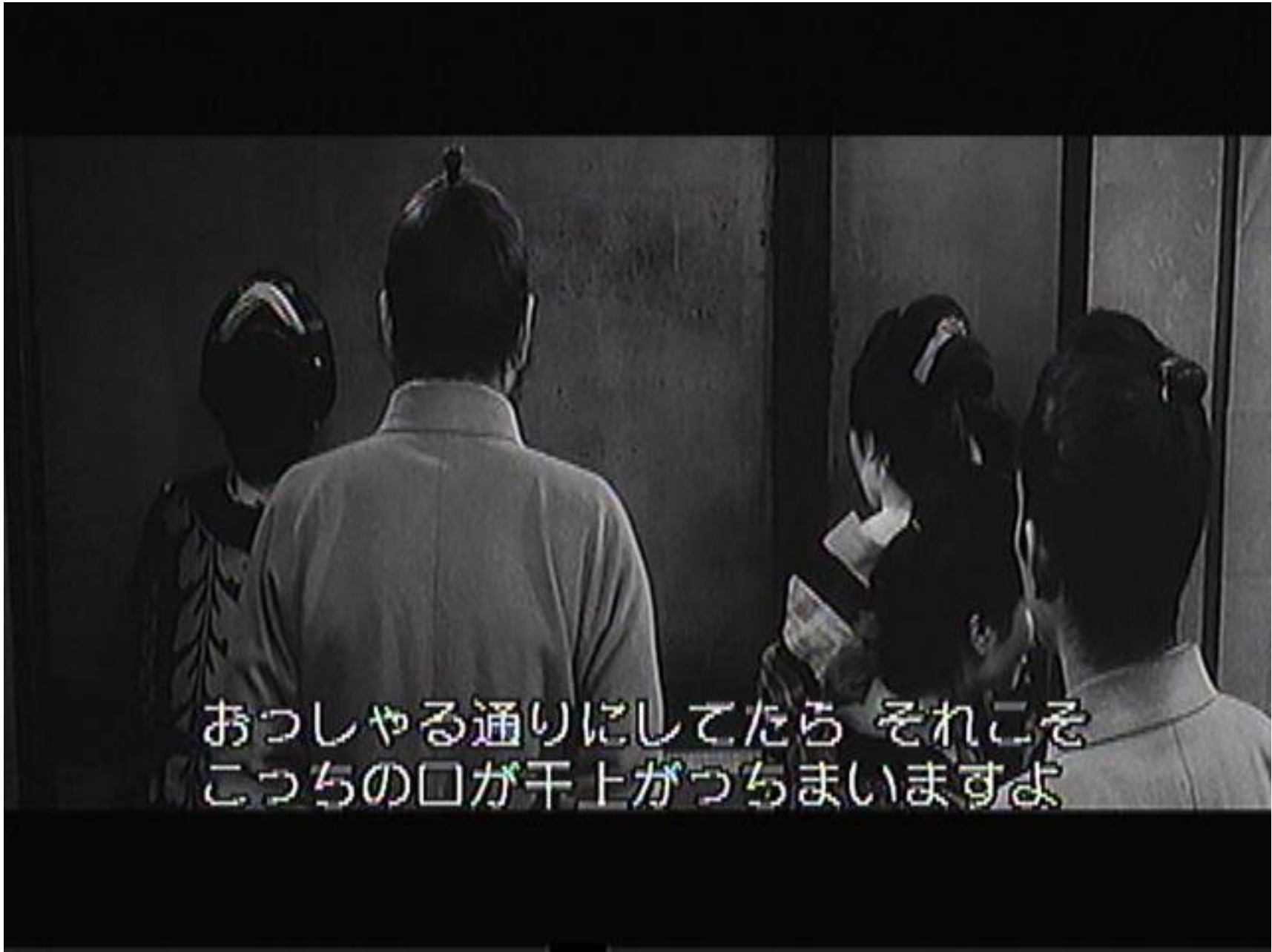


(赤ひげ)

その女は親元へ帰せと言ったはずだぞ



しかし その女は瘡毒だ  
客を取らせてはならん



おっしゃる通りにしてたら それこそ  
こっちの口が干上がっちゃいますよ



では 牢屋の臭い飯でも食うか



あたしなんかより隣の子を  
助けてやって下さい



それで お前は よくなったかい



分からないわ<sup>でも</sup>






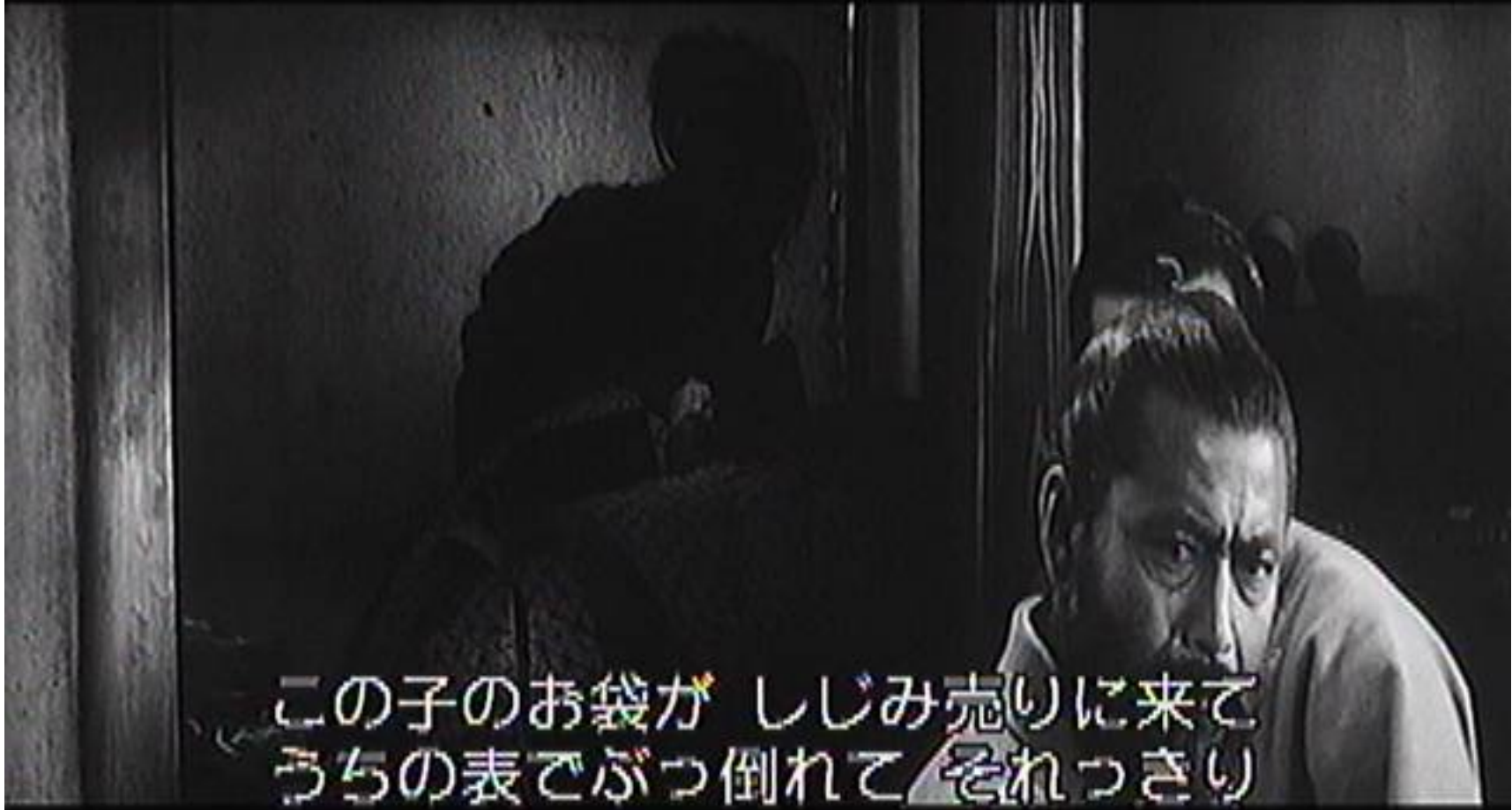
あなたを看病するのが  
私とても楽しかったわ



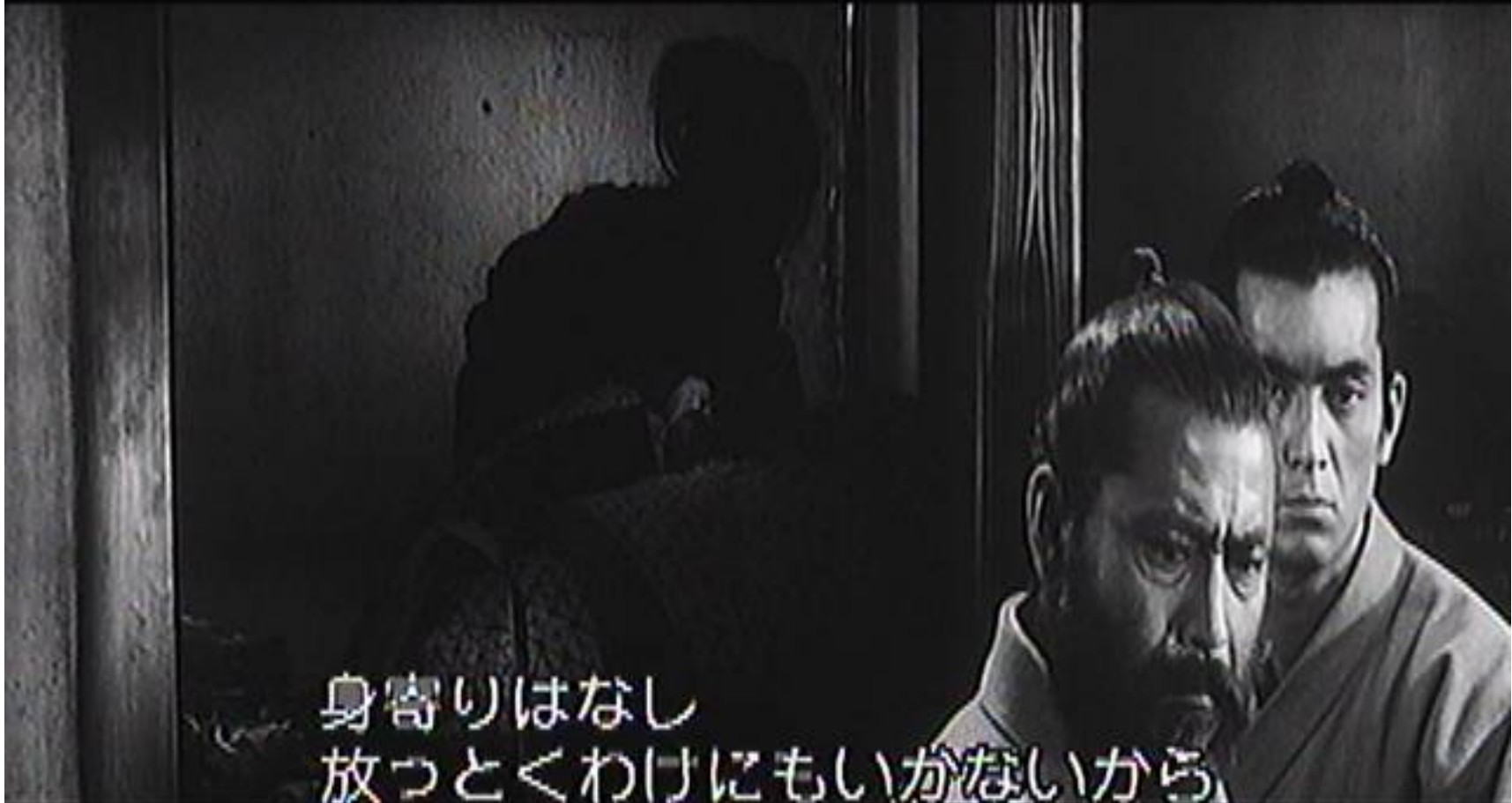
じゃ私は早くよくなりすぎて  
悪かったかな



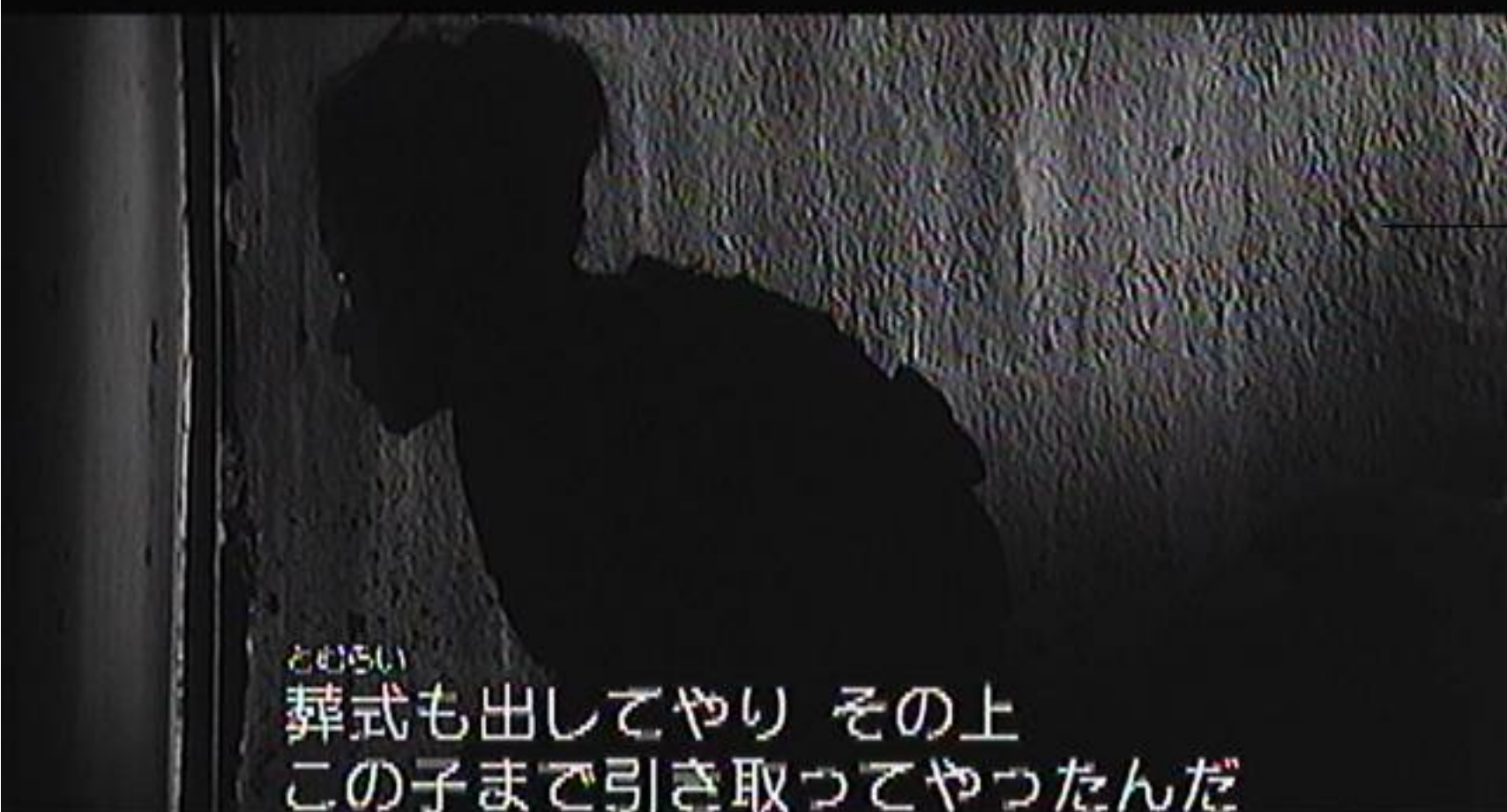
そんな、あなたがよくなって  
もっと、もっと嬉しいわ



この子のお袋が しじみ売りに来て  
うちの表でぶっ倒れて それっさり



身寄りなし  
放っとくわけにもいがないから



とむらい  
葬式も出してやり その上  
この子まで引き取ってやったんだ



(きん)  
また始めやがった。面あてがましいい



このカキはね 最初にここを  
拭かせてから





何かって言うと この板の間を  
拭いてばかりいやがる





ひどい熱です



この子は養生所で引き取るぞ



頼みもしねえのに  
このシマに鼻を突っ込みやがって



わしは医者だ。病人のいる限り来る



なに？ 変な意地を張ると  
一生片輪になるぜ



下手な医者の手には掛かると  
命が危ないというではないか







手足の二本や三本  
へし折るぐらいのことは やりかねんぞ











その辺から板切れを十枚ほど  
探してこい



保本 手当てをしてやれ





板が来たら 折れたところに  
副木を当てて布を巻くんだ

そえ進




少し やりすぎたようだな



もう少し加減をすればよかった



うん これはひどい  
こんな乱暴はよくない



医者ともあろう者が  
こういうことをしてはいけない



この子は養生所で引き取る  
文句があつたら どこへでも届け出る





何のためにこんな子供が  
こんなに苦しまなければならないのか





この子は体も病んでいるが  
心がもつとやられている



火傷のようにただれているんだ



保本 この子はお前に預ける



これはお前の最初の患者だ  
ちゃんと癒してみろ

なむ

おとよを  
白牢に  
収容する

(保本の声)

二月九日


おとよを白牢に収容する



奇妙な目つきで私を眺めた


二月十日  
朝方 おとよは  
意識を回復したか  
と  
し  
し  
し

二月十日 朝方 おとよは  
はっきり意識を回復したが




恐ろしく疑い深く 変に高慢な  
人を寄せつけない目つきだ





何をするんだ  
お前は、ここの病人だよ



食べる物や着る物 いや  
薬代の心配もいらなんだよ  
ぐすり





床を拭いて 拭いて 拭き続けた



手に負えません  
診察もさせませんし



薬を与えようとするとはねのけるんです



どれ わしがやってみよう







あの人はい…  
なぜ私をぶたなかつたの？



薬を何度もはねのけたのによって  
言っただね



世の中には  
心の優しい人もいるんだよ



お前はただ これまで  
そろそろ人に会わなかっただけさ




私 だまされないわよ



いつも お母さんが言ってたわ



人を頼ったり信用したりしちゃ  
いけないって



お前のその いじめつけられて  
片輪になった心を癒したいんだよ





(涙声)  
かわいそうにな



お前は 本当はいい子なのに


















お前は ゆうべ壊した茶わんを  
買うために、乞食をしたんだね



なぜ そんなことをするんだい  
乞食までして



私は茶わんのことで  
お前を責めたかい




もし私が  
そんなふうに見えたんなら謝る





佐八が死んだ夜から  
お前は ろくに眠っておらん



私は 自分のことだけに  
とらわれてました



お前をここに入れたのは  
天野さんの差し金ではない





事情を聞いて わしが勧めたことだ



私は なってませんね 何もかも



六助や佐八は  
あんなに不幸せだったのに



恨み言ひとつ言わず  
静かに死んでったじゃないか



おとよを見る お前なんか  
幸せすぎて恥ずかしいぐらいだ



しかも 長崎帰りをひけらかして



まるで天下でもとったように  
思い上がって



この養生所まで ばかにして






いえ、先生まで軽蔑したり  
憎んだりして



私は下劣な奴です



気障で 生意気で 軽薄で



お前は 疲れすぎたんだ













私もいい子だから 薬も飲もう













お前は一所懸命 看病してくれたね  
私は夢うつつに覚えてるよ



でもそれは 去定先生に言われて  
しただけよ





先生はね、あなたを看病するのが



私の病気にも 一番いいんだって  
だから



それで お前は よくなったかい






あなたを看病するのが  
私とても楽しかったわ



じゃ私は早くよくなりすぎて  
悪かったかな



そんな、あなたがよくなって  
もっと、もっと嬉しいわ



じゃ、お前は  
本当によくなつたんだ





先生は名医だ



いや、偉い人だ



世の中には、ああいう人もいるんだ。




そういう人に会えて  
お前は幸せだったよ




でも、あなただって



何かあがりますか



いや 大したことはない  
少し急激に世の中を見すぎたんだ



いわば 子供で言うなら知恵熱だ







あなたがご病気の間、つきつきりで  
世話してくれたという あの...



おとよにですか？



あまりひどい物を若ていたので  
お役に立てばと思って



私の物を洗い張りして  
仕立て直したんですが



せつかく下すつた物を  
ドブへ捨てるって法があるがい



まさえさんがね、おとよにとって  
この着物をくれたんだ



ところが それを渡すと いきなり







あの子は 当たり前前の大人が  
一生かかって経験するより



もつといろいろな辛い目に遭って  
いじけてるんだ





現に保本には ほだされて  
一時すっきりなつてた



じゃ なせ近頃 保本先生に  
ああつん付んと



おとよちゃんは 保本先生を  
好きになりすぎたのよ



自分一人のものにしておきたいほど







それからでしょ？ また  
おとよちゃんが拗ねだしたのは

す



この着物をドブへ捨てたのも



それが あのお嬢さんの物だからですよ  
さっと



すると 保本先生に惚れたってのかい  
あの子ビガ？



ただ それに似た気持ちだるうって  
いろの









そのお嬢さんが 森先生のとこへ  
来たんじゃなく、てよかったねえ




お杉さんはね  
森先生に惚れてんですよ



このまま放つとくと お杉さんまで  
あのデビみたいになっちまいますよ







それより この子はやっぱり  
どうにもならないよ



泥棒されてんの<sup>に</sup>  
知らんぷりなんだからね




おとよは 大分よくなっただらしいな







相変わらず拗ねているようだが  
前の拗ね方と拗ね方が違う



前は人を憎むことしかできずに  
拗ねていた




お前に向かって 急に溢れ出した  
愛情の始末に困って拗ねている




いずれ その気持ちがお前だけでなく  
他の者に向けられる時が来る

ほか

A man with dark hair, wearing a light-colored kimono, stands in a dark room. He is looking slightly to his right. The background is dark and indistinct, possibly a doorway or a wall. The lighting is dramatic, highlighting the man's face and the texture of his clothing.

それを待つだけだ



泥棒を黙って見逃したと言っ  
てみんな おとよを責めているようだが



もう芽をふいた優しい心根が  
見て見ぬふりをさせたのかもしれん



お粥と船じゃ話が違いわよ





お粥盗むなんて  
よっほど ひもじかったんでしょ



おいら  
ひもじくねえことなんかねえよ



でも あたし  
泥棒するくらいなら乞食をするわ



食は好かねえ



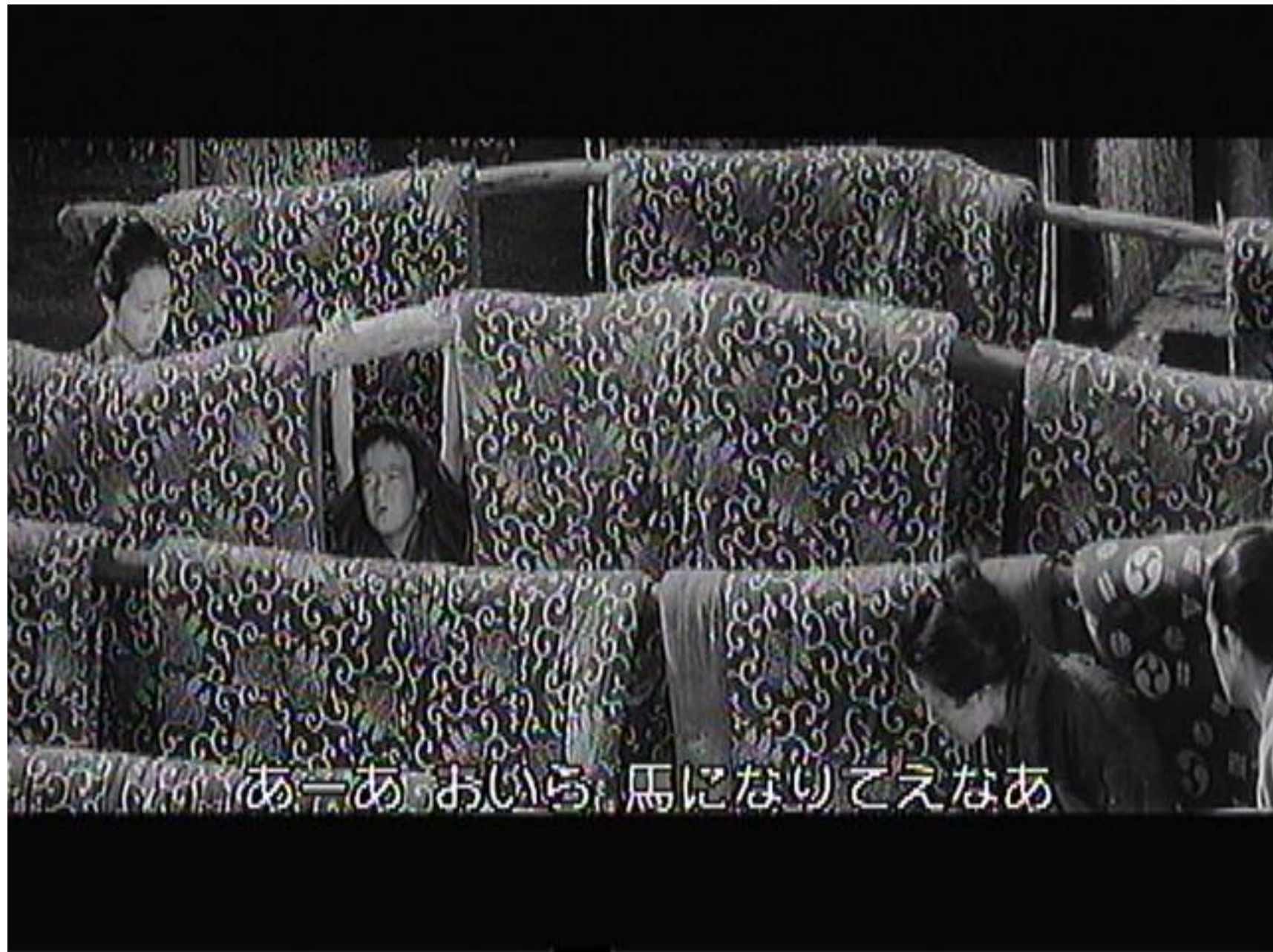
人にペコペコ頭を下げて  
男のすることじゃねえ



ちゃんもおつ母も  
見ちゃんたつて二人あらあ  
あん



ちゃんも おつ母も 貧乏しすぎて  
ほけちやつてるんだ



あーあ おいら 馬になりてえなあ





馬は草食ってりゃいいんだもん  
草なら どこにでも一杯あらあ



私たちの余ったご飯を  
持ってきてあげるから



だから なるだけ泥棒なんか  
しないでね



もっとお食べ 育ち盛りに  
たった一膳さりってことがあるもんか



いい加減におし！  
大体お前たち 食べすぎるよ！





病人が首をくくる間、  
お前は一体 何をしてたんだ



お杉さんを責めるのは、やめて下さい。





私が お杉さんをお呼び出したのが  
いけなかったんです



医者と付き添いが乳練り合って  
病人なんぞは そつちのけだ



思えば とんでもない所へ  
娘を預けたもんだ



まったく かわいそうだ



あなたの娘は  
情けない父親を持って



普通の父親なら  
まず娘の容体を聞くはずだ



しかし… 娘は命を取りとめたと  
聞いたから



それなら なぜ娘に会おうとしない





あんたは娘から目をそらしている



人認預けっぱなしで ずましている



あんなには親の気持ち分からないんだ  
あんな娘を持った親の辛さが




それは分かる  
しかし一番かわいそうなのは お杉だ



あんたは娘のために



お杉の娘盛りを 牢格子の中へ  
閉じ込めて 当たり前だと思っている



いくら奉公人が知らんが  
そんな権利は あんたにはない



あなたの娘は 近頃  
正気に戻る時間が長くなった





だから自殺する気にもなったんだ



死なせてやるのが慈悲かもしれんが  
わしは医者だ



(赤ひげ)  
何と言われても  
この子を吉様に戻すつもりはない



この子は お前に返せば  
また病気になる



ああ そんな奴に触るな  
手が腐るぞ



はらわた  
貴様の臓腑は腐っている



自分で自分を嗅いでみる  
へトが出るほど臭いはずだ



じゃ貴様は、鼻まで腐ってるらしいな





あたしは  
こんないい着物を持ってるのよ



この子は おいら達の子だ  
出てけ！



さあ 今日はおむすびにしといて  
あげたわ



今日は もういらねえんだ



おいら みんなで  
いいところ行くんた



ずっと遠いところなんだ  
でもそこへ行けば



もう食い物の心配もいらねえし  
楽に喜らせるんだぜ



遠くにお金持ちの身寄りでもあるの？






そこはな  
寒くもなけりや暑くもねえ



いつも花がいっぱい咲いてて



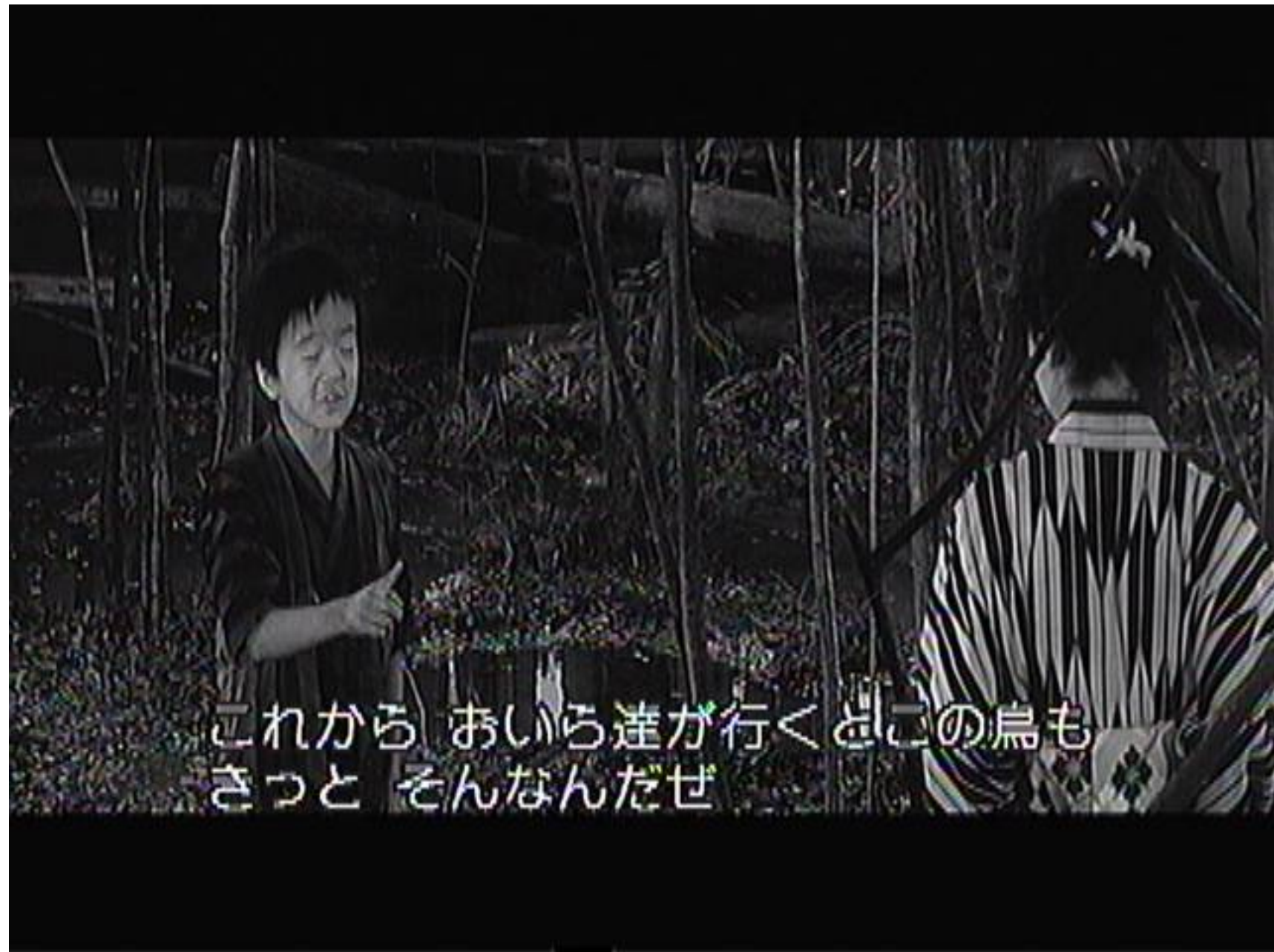
見たこともねえような きれいな鳥が  
たくさん飛んでるんだって




西の方によ



今日の姉ちゃんは 本当にきれいだった



これから おいら達が行くとこの鳥も  
さつと そんなんだぜ



もう 姉ちゃんには会えねえんだ

A young boy with dark hair is shown from the chest up, looking directly at the camera with a slight smile. He is wearing a dark, textured garment. The background is dark and appears to be an interior or a shelter made of wooden poles and fabric. The lighting is low, creating a somber atmosphere.

姉ちゃんは 本当にきれいだ







お前は この三月から  
御目見医に上がることになった



保本も変わったな



こんな所からは  
どうしても出ていくと



それがどうした  
俺は 誰が何と言っても ここに残る




お前 近頃 話しふりまで  
先生に似てきたぞ



先生 早く  
一家心中が担ぎ込まれたんです







それもあの小鼠の一家なんですよ  
かわいそうに



先生 長坊は助かるの？  
長坊は



せめて あの子だけは  
助けてやって下さいよ



あの子は少し毒を吐いた  
朝までもてば助かるだろう



よりにもよつて、小鼠が  
石見銀山の鼠取り飲むなんて  
いわみ





(母の声)  
その子は そのまま  
死なせてやって下さいな



なぜ私たちを助けるんです





こうするより しょうがないから




子供たちも その方がいいって  
言うから




みんな薬を飲んだんです




なぜ みんなは  
放つといってくれないんでしょう



賄いのおばさん達が  
長次を呼び返しているんだ



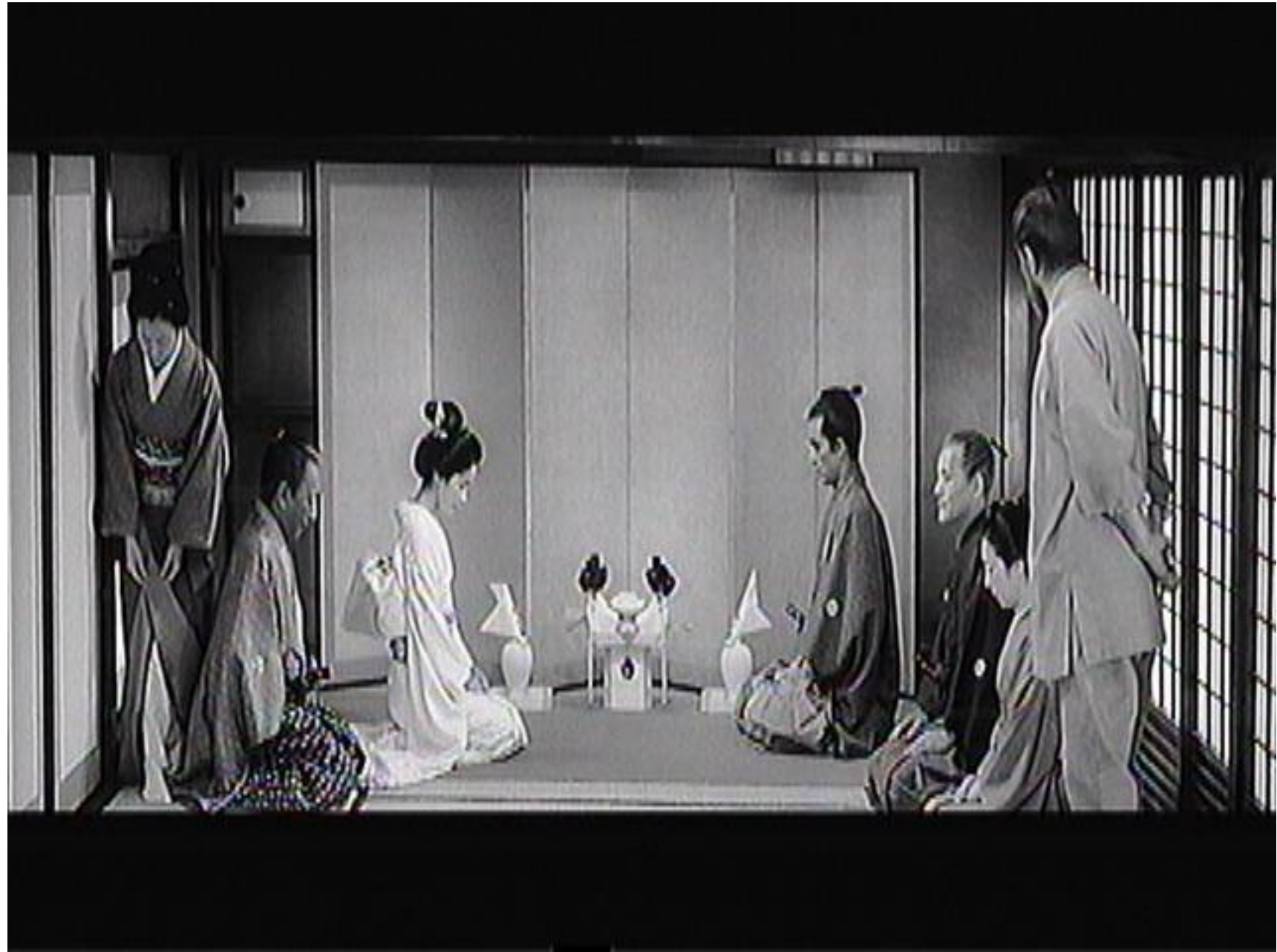
井戸の中へ向かって叫べば  
死にかかっている者も



呼び返せるという言い伝えが  
あるんだ

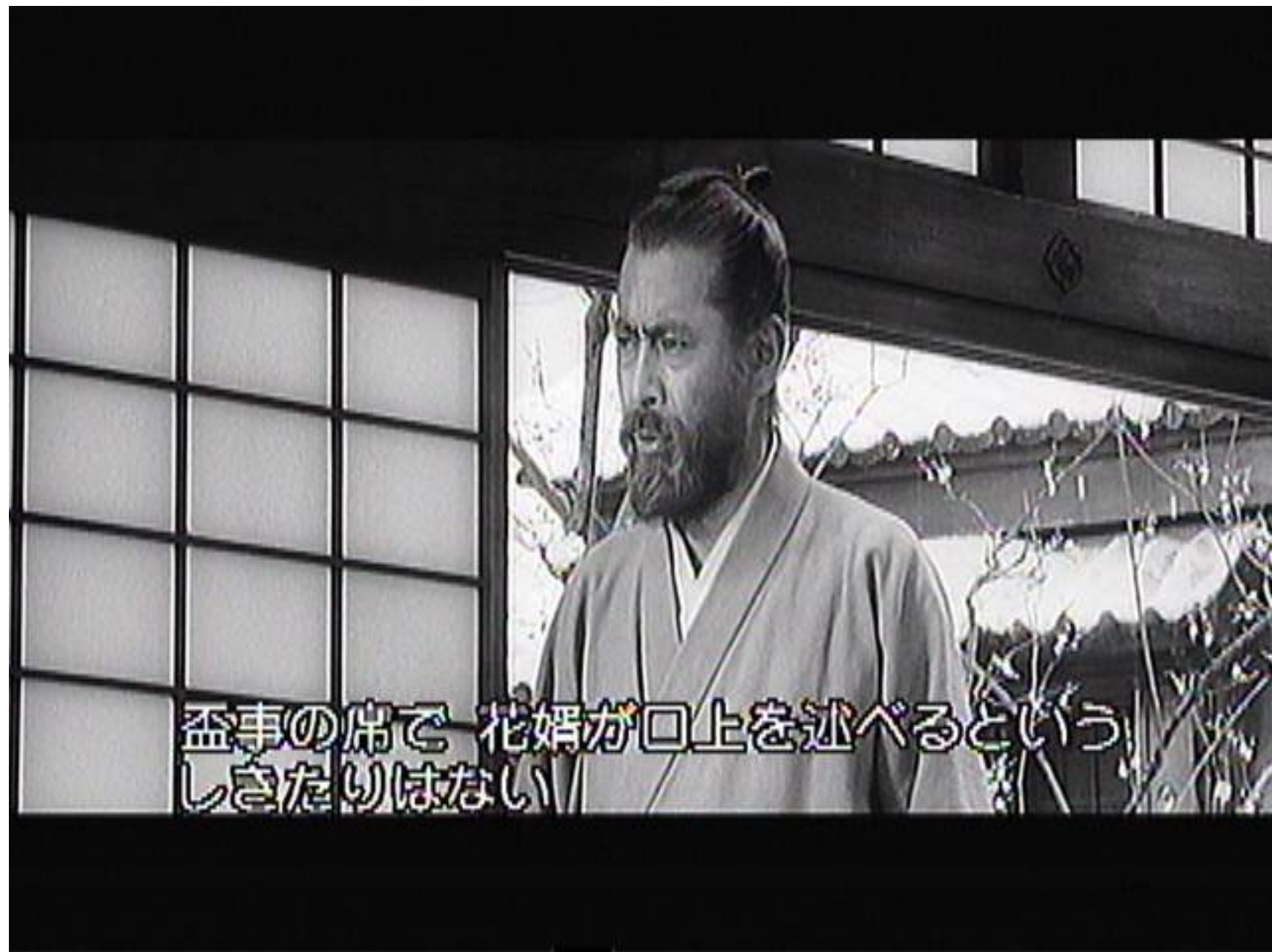








盃の前に まさえさんに  
聞いてもらいたいことがあるんです



盃事の席で花婿が口上を述べるという  
しきたりはない



私は養生所に残るつもりです




あなたにも貧乏を  
耐えてもらうことになりましたが



ふん お前は わしを怒鳴らせたいのか



怒鳴っても構いません  
力づくでも 私は養生所に残ります



先生は私に 医者はどうあるべきかを  
教えて下さいました





もう一度言う  
お前は後悔するぞ

終

